

西岡本遺跡第4・5・6次発掘調査報告書

—本山浄水場内大容量送水管及び膜ろ過処理施設建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

2009年1月

神戸市教育委員会

序

神戸の市街地東部、真ん中を南北に貫流する清流・住吉川のほとり。緑豊かな六甲山の山裾に開けた閑静な住宅街の一角に本山浄水場は位置します。住吉川の精良な水を配する役割を担うこの浄水場において、新たな上水道施設の建設が計画されました。本書は工事に先立ち実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

神戸市の水道事業は明治33(1900)年には給水が開始され、以降100年以上が経過しています。良質で安全な水を供給しようとする日々の努力-保守・点検が繰り返されています。このたびの新たな上水道施設の建設は、さらなる快適な水環境を創造する上で非常に大事な事業です。

昔から人々の生活と水の関わりはなくてはならないものでした。山・川…自然豊かなこの地域で、古くから人々が生活を営んできました。

『西岡本遺跡』と今、我々が呼んでいるこの地域は、神戸市内で最も古くから人々が生活をしてきた痕跡が発見されている場所のひとつです。

このたびの調査では、今からおよそ900年前、平安時代から鎌倉時代にかけての建物址などが発見されました。平安時代に、すでにこの山懐までを生活領域として切り開いてきた先人たちの足跡が見つかりました。

浄水場から清らかな水が送られるように、ここで得られた新たな情報が、広く皆様方のもとへと届き、活用されることを願います。

最後になりましたが、現地における発掘調査事業の円滑な推進ならびに報告書刊行にご協力いただきました関係諸機関、各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成21年1月
神戸市教育委員会

例 言

1. 本書は、神戸市東灘区西岡本6丁目10-1に所在する神戸市水道局本山浄水場内における西岡本遺跡第4・5・6次埋蔵文化財発掘調査についての報告書である。
2. 調査は本山浄水場内における上水道及び浄水施設建設に伴うもので、神戸市教育委員会・財団法人神戸市体育協会の神戸市水道局の依頼を受けて実施したものである。
3. 現地での調査は平成13年度、14年度、19年度の計3回実施している。下表、組織表ならびにP.6のI-4、本山浄水場内における発掘調査についての項を参照いただきたい。本書の作成は、各調査担当者の助言を得て藤井太郎が行い、金属器については中村大介が行った。なお、平成13年度第4次調査、平成14年度第5次調査については一部、当該年度の「神戸市埋蔵文化財年報」において報告しているが、本書の内容をもって正式報告とする。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「西宮」を、詳細位置図は、神戸市発行の2,500分の1の地形図「赤塚山」の一部を使用した。
5. 本書で使用した方位は基準北で、その座標は日本測地系の平面直角座標系第V系である。標高は東京湾中等準位(T.P.)で表示した。
6. 現地での遺構及び遺物出土状況等の写真撮影は各調査担当者が行い、出土遺物の写真撮影は神戸市埋蔵文化財センターにおいて独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 牛嶋茂氏の指導の下、杉本和樹(西人スタッフ)が行った。
7. 調査地の航空写真撮影については平成19年度調査において株式会社GEOソリューションズに委託した。
8. 整理作業は水洗・接合・復元を神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、土器の実測、図面の浄書は藤井が行った。また出土金属器については実測及び文章の作成を中村が行い、図面の浄書については藤井が行った。
9. 本書にかかわる出土遺物及び図面・写真等の記録類は神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
10. 現地での調査及び本書の作成にあたっては下記の方々に協力いただきました。ここに記して深謝いたします。
神戸市水道局 奥平野浄水場 本山浄水場 小磯記念美術館 山本雅和氏
11. 発掘調査及び報告書作成事業は神戸市文化財保護審議委員会による指導のもと、以下の組織で実施した。

神戸市文化財保護審議委員会 史跡・考古資料担当(平成13・14・19・20年度)

榎上重光	前神戸女子短期大学教授(～平成19年7月14日)
工藤善通	ユネスコ・アジア文化センター文化財協力事務局研修部長(平成13・14年度)
	大阪府立狭山池博物館館長(平成19・20年度)
和田晴吾	立命館大学教授

教育委員会事務局	平成13年度	平成14年度	平成19年度	平成20年度
教育長	木村良一	西川和雄	小川謙三	橋口秀志
社会教育部長	岩野法夫	岩野法夫	黒住康久	黒住康久
参事(文化財課長事務取扱)	—	—	柏木一孝	柏木一孝
文化財課長	桑原孝典	桑原孝典	—	—
社会教育部主幹(埋蔵文化財センター所長事務取扱)	宮本郁雄(1月～)	宮本郁雄	渡辺伸行	渡辺伸行
社会教育部主幹(埋蔵文化財指導係事務取扱)	渡辺伸行	渡辺伸行	丸山 潔	丸山 潔
埋蔵文化財調査係長	丹治康明	丹治康明	千種 浩	千種 浩
文化財調査主査	宮本郁雄(～12月) 丸山 潔 菅本宏明 千種 浩	丸山 潔 菅本宏明 千種 浩	丹治康明 安田 滋 山本雅和	丹治康明 安田 滋
事務担当学芸員	菅本 敏	内藤俊哉	阿部敏生 中谷 正	阿部敏生 中谷 正
調査担当学芸員	—	浅谷誠吾	—	—
整理担当学芸員	黒田孝正	関野 豊	黒田孝正	黒田孝正 佐伯二郎
保存科学担当学芸員	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介

財団法人 神戸市体育協会	平成13年度	平成19年度	平成20年度
会長	釜山孝俊	釜山 宏	釜山 宏
副会長(事務理事事務取扱)	鈴木昌男	水田健次	小川謙三
常務理事	堀井昭武	磯弘四郎	磯弘四郎
総務課長	前田徳晴	横間 勇	香沢 肇
事業係主査(文化財課主査業務)	丸山 潔 菅本宏明	—	—
総務課主査(文化財課主査業務)	—	山本雅和	—
事務担当学芸員	川上厚志	—	—
調査担当学芸員	富山直人	藤井太郎	—
整理担当学芸員	—	—	藤井太郎

目次

序 例言 目次

I. はじめに	1
1. 西岡本遺跡の位置と環境	1
2. 歴史的環境—周辺の主な遺跡—	2
3. 西岡本遺跡における発掘調査の成果	5
4. 本山浄水場内における発掘調査について	6
II. 調査の成果—検出遺構と出土遺物—	9
1. 1区	9
2. 2区	10
3. 3区	12
4. 4区	15
5. 5区	16
(1) 掘立柱建物	18
(2) 棚列	22
(3) その他のピット	22
(4) 溝	22
(5) 土坑	23
(6) 落ち込み	26
(7) 遺構に伴わない遺物	35
6. 金属器	37
III. まとめ	44
1. 3次にわたる調査の成果について	44
(1) 遺跡の時期と集落形成	44
(2) 検出遺構の検討—建物と落ち込み—	45
2. 調査地における石に関する事象	47
(1) 転石の加工について	47
(2) 第6次調査出土の矢穴石	48
3. あとがき	50

報告書抄録

図版目次

第1図 調査地位位置図	1
第2図 周辺の主な遺跡	3
第3図 西岡本遺跡調査地位位置図	5
第4図 本山浄水場内調査範囲図	7
第5図 調査地遺構全体平面図	8
第6図 1区 平・断面図	9
第7図 2区 平面図	10
第8図 2区 土層断面図	11
第9図 SX02出土遺物	11
第10図 3区 東半平面図	12
第11図 SK03・04 断面図	12
第12図 SK03出土遺物	12
第13図 3区 平・断面図	13
第14図 3区 遺構に伴わない遺物	14

第15図 4区 平・断面図	15
第16図 5区 調査区断面図(西壁)	16
第17図 5区 遺構平面図	17
第18図 SB01 平・断面図	18
第19図 SB02・03 平・断面図	19
第20図 SB04 平・断面図	20
第21図 SB05 平・断面図	20
第22図 SP501・506 断面図	20
第23図 SB05 ピット内出土遺物	21
第24図 SB06 平・断面図	21
第25図 SA01 平・断面図	22
第26図 その他のピット出土遺物	22
第27図 SD01出土遺物	22
第28図 SK07 平・断面図及び出土遺物	23
第29図 調査区北東部平面図及びSK08断面図	24
第30図 SK08出土遺物	25
第31図 SK09 平・断面図及び出土遺物	25
第32図 SX01 平・断面図	27
第33図 SX01出土遺物(1) 土師器・黒色土器・瓦器	29
第34図 SX01出土遺物(2) 須恵器	30
第35図 SX01出土遺物(3) 白磁・青磁・須恵器・その他	32
第36図 SX01出土遺物(4) 土師器	34
第37図 遺構に伴わない遺物(1)	35
第38図 遺構に伴わない遺物(2)	36
第39図 鉄釘	37
第40図 鉄釘以外の金属製品	39
第41図 銅製品の蛍光X線分析結果	42
第42図 第4次調査Ⅱ区SX01検出状況	47
第43図 矢穴石矢穴痕拓影	49

挿図写真目次

挿図写真1 調査作業風景	7
挿図写真2 整理作業風景	7
挿図写真3 SX02検出状況(南東から)	11
挿図写真4 3区 遺構に伴わない遺物	14
挿図写真5 SK08断面(東から)	24
挿図写真6 石材に付着した鉄鏝(254)	40
挿図写真7 磁坪のミクロ組織 (デジタルマイクロスコープ画像)	43
挿図写真8 SK07掘形にかかる転石の削り面	48
挿図写真9 第6次調査 SX01出土矢穴石	49
挿図写真10 矢穴痕近接写真	49

表目次

第1表 新旧調査区対応表	6
第2表 鉄釘一覧表	38
第3表 鉋滓一覧表	43

写真図版目次

写真図版1

1. 調査地遠景 (南上空から:空撮)
2. 調査地遠景 (南上空から:空撮)

写真図版2

1. 旧第4次調査Ⅱ区 (南東から) = 5区北東部
2. 旧第4次調査Ⅱ区SX01 (北東から) = 5区SX01

写真図版3

1. 3区西半全景 (東から)
2. 3区東半全景 (南東から)
3. 3区 SK04 (西から)
4. 3区 基本土層
5. 1区全景 (北から)
6. 1区近景 (東から)

写真図版4

1. 2区全景 (西から)
2. 2区南半近景 (東から)
3. 2区北半近景 (北から)

写真図版5

1. 4区全景 (東から)
2. 4区近景 (東から)
3. 4区 Pit10~13近景 (東から)

写真図版6

- 5区全景 (北西から)

写真図版7

1. 5区全景 (東から)
2. 5区全景 (北東から)

写真図版8

1. SB01 (南東から)
2. SB01:SP105 (東から)
3. SB02 (南から)
4. SB02:SP204 (東から)
5. SB03 (東から)
6. SB03:SP303 (西から)
7. SB03:SP306 (東から)

写真図版9

1. SB04 (南から)
2. SB04:SP405 (南から)
3. SB05 (北東から)
4. SB05:SP506 (南東から)
5. SB06 (南から)
6. SB06:SP604 (南東から)
7. SA01:Pit15 (南から)
8. SD01 (南から)

写真図版10

1. SK07 (北東から)
2. SK07土層断面 (北東から)
3. SK09 (南東から)

写真図版11

1. 5区垂直写真 (遠景)
2. 5区垂直写真

写真図版12

1. SX01 (南東から)
2. SX01検出状況 (第6次調査)
3. SX01遺物出土状況1
4. SX01遺物出土状況2
5. SX01遺物出土状況3

写真図版13 ビット・土坑・溝出土の遺物

写真図版14 SX01出土の遺物 (1) 須恵器・土師器

写真図版15 SX01出土の遺物 (2) 土師器

写真図版16 SX01出土の遺物 (3) 土師器・黒色土器

写真図版17 SX01出土の遺物 (4) 須恵器

写真図版18 SX01出土の遺物 (5) 須恵器

写真図版19 SX01出土の遺物 (6) 須恵器・土師器・白磁

写真図版20 SX01出土の遺物 (7) 須恵器・土師器・瓦器

写真図版21 SX01出土の遺物 (8) 白磁・須恵器・土製品
及び遺構に伴わない遺物 (石鍋)

写真図版22 遺構に伴わない遺物

写真図版23

1. 炉壁 (SX01出土スサ混じり土塊)
2. サヌカイト片 (SX01他出土)
3. 石鏝 (SX01他出土)
4. 石製品 (SX01他出土)

写真図版24

1. SX01及びその他出土の鉄釘
2. 同X線透過像

写真図版25

1. SX01及びその他出土の釘以外の金属製品
2. 同X線透過像
3. SX01出土鉋滓
4. 同X線透過像

I.はじめに

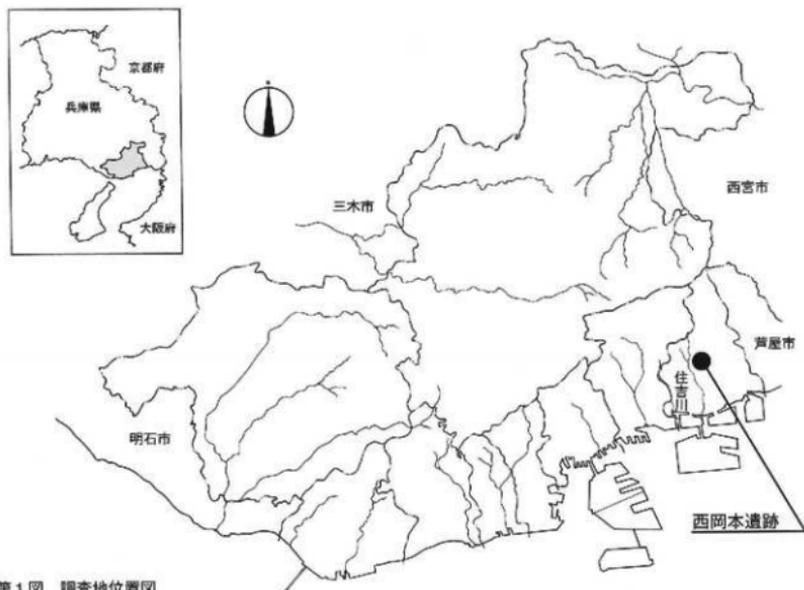
1. 西岡本遺跡の位置と環境

西岡本遺跡は、現在の神戸市東灘区西岡本5・6丁目付近に所在する遺跡で、住吉川により形成された扇状地の左岸、高位段丘上に立地する。遺跡内の現標高は高位部約81m、低位部約57mで、北西から南東方向へ傾斜地形を形成する。

住吉川は、六甲山頂付近に源を發し、調査地のやや上流で深く細い谷筋を流れ出る。西の谷筋からの流れを加えて山稜を抜け出し、ここで川幅を拡げ、東へわずかに蛇行する。遺跡はこの蛇行点の東に張り出した山稜の下に拡がる。その後、川の流れは東側に緩やかに弧を描きながら大阪湾へと注ぐ。延長約8km、上流域では山裾を深く削り、中流域では大量の土砂により自然堤防が発達し、周辺の土地より川底が高い典型的な天井川となる。明治7年に敷設された官営鉄道（現JR）は開通時より河川底を隧道で抜ける。下流域でわずかに川幅を拡げ、緩やかな流れとなり、海岸部へ至る。

扇状地の形状は、住吉川を中心に東の天井川、西の新田川との間に明瞭に表れ、市街地を東西に疾走する鉄道三線（北から阪急、JR、阪神）の軌道からも読み取れる。勾配を避け、平坦地を遊んで敷設された結果である。西岡本遺跡はこの扇の要の位置にある。

現在の遺跡の周辺は、JR住吉駅から北に直線距離で約1km、六甲山の山裾に拡がる高台の閑静な住宅街となっている。付近からの眺望はよく、眼下の神戸の市街地は勿論、空気の澄んだ日には大阪湾を挟み、対岸の平野部から生駒山系までを望むことを得る。



第1図 調査地位圖

2. 歴史的環境—周辺—の主な遺跡—

神戸の市街地東部では住吉川、市境付近にある芦屋川の大きな流れをはじめ、六甲山の山腹から流れ出る小河川に沿って多くの遺跡が形成され、市域でも遺跡分布の密度の濃い地域である。また旧石器時代～近代に至る様々な時代の遺構・遺物が確認されている。

旧石器時代

当西岡本遺跡での第1次調査⁽¹⁾、南東に隣接する岡本北遺跡⁽²⁾での第1次調査においてナイフ型石器が確認されている。

縄文時代

当遺跡で、早期中頃の高山寺式の押型文土器を伴う直径約2mの竪穴住居址が確認されている。神戸市域ではこの他に中央区熊内遺跡で住居址が確認されているが、兵庫県下での縄文時代早期の住居址の検出は稀である。本山遺跡や本庄町遺跡で中期の遺物が出土し、本庄町遺跡、岡本東遺跡⁽³⁾では後期の貯蔵穴が確認されている。

弥生時代

本山遺跡で前期前半、畿内最古段階の土器や木製品が検出されている⁽⁴⁾。また海岸部の砂堆上に立地する北青木遺跡⁽⁵⁾は縄文晩期から継続する集落遺跡で、本山遺跡と同様、中期頃までの土器の出土が確認されている。近年（平成18年）、中期末と考えられる扁平鈕式の銅鐸が埋納坑より出土し、最も海岸部に近い場所での出土例となった。本山遺跡でも集落内から銅鐸が出土している⁽⁶⁾。

中期には背後の丘陵上や山腹に高地性集落が出現する。赤塚山遺跡、荒神山遺跡、全島山遺跡、保久良神社遺跡などが知られている。保久良神社遺跡⁽⁷⁾では大阪湾型銅戈が発見されており、また当遺跡の西方約2kmには銅鐸14丁、銅戈7本が一括埋納された桜ヶ丘銅鐸出土地⁽⁸⁾がある。桜ヶ丘から東に順に渦ヶ森銅鐸⁽⁹⁾、生駒銅鐸、森銅鐸の丘陵上から発見された各銅鐸と前述の本山銅鐸と北青木銅鐸の平野部から出土した銅鐸があり、青銅器分布において重要な地域である。

弥生時代後期には岡本北遺跡⁽¹⁰⁾、郡家遺跡⁽¹¹⁾、住吉宮町遺跡⁽¹²⁾、魚崎町遺跡⁽¹³⁾、森北町遺跡⁽¹⁴⁾などで新たに集落が形成される。またこれらの遺跡では円形周溝墓や方形周溝墓が検出されている⁽¹⁵⁾。

古墳時代

六甲山南麓、市街地東部においては海岸線に造られた東求女塚古墳⁽¹⁶⁾、苑女塚古墳、西求女塚古墳と、段丘端に立地するヘボソ塚古墳⁽¹⁷⁾の前期古墳が知られる。竪穴式石室を主体とし、船載の三角縁神獸鏡を副葬する古墳である。

中期になると住吉宮町遺跡で古墳の造営がはじまり、前方後円墳の坊ヶ塚古墳⁽¹⁸⁾や帆立貝式古墳の住吉東古墳⁽¹⁹⁾が造られ、周辺に一辺10～20mの小方墳が群集して築造される。沖積地に埋没した古墳群が発見される一方で、丘陵や段丘上でも造墓活動が活発となり、後期から飛鳥時代にかかる古墳群の形成が認められる。当遺跡、岡本梅林古墳群⁽²⁰⁾、御影山手遺跡などが確認されている。

奈良～平安時代

住吉宮町遺跡で掘立柱建物、竪穴住居が検出され、「橋東家」、「免」と記された墨書土器が出土した⁽²¹⁾。古代山陽道葦屋驛に比定される深江北町遺跡⁽²²⁾でも大型の掘立柱建物が検出され、「驛」と書かれた墨書土器、記銘木簡、海獣葡萄鏡、帯金具が出土している。

平安時代になると中～高位段丘上で一般の集落とやや様相を異とする遺跡が現れる。本山北遺跡⁽²³⁾では白磁碗、青白磁合子、取瓶、鉄製紡錘車、ガラス玉などを副葬した木棺墓が検出されている。



第2図 周辺の主な遺跡 (Scale:1:30,000)

中世～近世 沖積地のほとんどの遺跡で中世と考えられる水田面を確認している。住吉宮町遺跡などにおいて獨立柱建物などの検出事例は増加している。

近世初頭には六甲山南東麓で大坂城の再築城などで攀って採石が行われるようになる。また住吉川流域では水車業が主要産業となり、綿花、菜種からの搾油、「灘の酒」に係る酒米の精米、江戸時代後期に台頭する「灘目素廻」に係る水車業が、急流を利用した地形的要因や石臼などに用いる花崗岩（御影石）を産する土地柄から興隆を極めた^{20）}。

註

1. 浅岡俊夫編『神戸市東灘区 西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会 2001
2. 浅岡俊夫編『神戸市東灘区 岡本北遺跡』六甲山麓遺跡調査会 1992
3. 中山浩彦・丸杉俊一郎『岡本東遺跡第1次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
4. 安田滋『本山遺跡第17次調査』『平成7年度神戸市埋蔵文化財調査年報』神戸市教育委員会 1998
5. 小川良太・山下史朗『北青木遺跡』兵庫県文化財調査報告第92冊 兵庫県教育委員会 1986
菅本宏明・石島三和『北青木遺跡発掘調査報告書-第3次-』神戸市教育委員会 1999
6. 神戸市教育委員会『本山遺跡第12次調査の概要』1991
7. 新修神戸市史編集委員会編『保久良神社遺跡』『新修神戸市史』歴史編Ⅰ 自然・考古 1989
8. 武蔵誠・村川行弘『神戸市板ヶ丘銅鏝・銅戈調査報告書』兵庫県文化財調査報告第1冊 兵庫県教育委員会 1969
9. 兵庫県『住吉村新発見の銅鏝』『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書 第11輯』1935
10. 村川逸朗・小林健二『岡本北遺跡第2次調査』『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』1998
11. 郡家遺跡については各年度の『神戸市埋蔵文化財年報』参照
12. 丸山謙『住吉宮町遺跡（第11次調査）』神戸市教育委員会 1990
菅本宏明『住吉宮町遺跡第31次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』2001
13. 岩田明広『神戸市東灘区魚崎中町遺跡（第3次）』神戸市教育委員会 1997
14. 丹治康明・須藤宏『森北町遺跡』『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992
15. 岸本一宏『兵庫県下の弥生時代「開溝墓」集成』『ひょうご考古』第7号 2001
16. 渡辺伸行『東永女塚古墳』『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』1985
17. 新修神戸市史編集委員会編『ヘボン塚』『新修神戸市史』歴史編 自然・考古 1989
18. 渡辺昇他『坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』兵庫県文化財調査報告第81冊 兵庫県教育委員会 1990
菅本宏明『坊ヶ塚古墳 試掘調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
19. 丹治康明他『住吉宮町遺跡第9次調査』『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
20. 山内英正『岡本梅林古墳第1次調査』『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
21. 菊池逸夫・野村信『住吉宮町遺跡第23次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
22. 山下史朗他『神戸市東灘区深江北町遺跡』兵庫県文化財調査報告第54冊 兵庫県教育委員会 1988
村上賢治他『神戸市東灘区深江北町遺跡（Ⅱ）』兵庫県文化財調査報告第88冊 兵庫県教育委員会 1991
山本雅和編『深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書-葦原藤家園遺跡の調査-』神戸市教育委員会 2002
23. 内藤俊哉『本山北遺跡第2次調査』『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993
24. 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史』歴史編Ⅲ 近世 1992

3. 西岡本遺跡における発掘調査の成果

西岡本遺跡においては現在までに7次（本書は第4・5・6次調査について所収。作成中に個人住宅建設に伴う調査を1件実施）にわたる発掘調査が実施されてきた。

第1次調査は昭和63年度に共同住宅建設に伴い実施された。この調査では旧石器時代の石器、縄文時代早期の竪穴住居址、弥生時代後期の竪穴住居址、古墳時代後期の横穴式石室11基（野寄古墳群）、古代～中世の掘立柱建物、近世の水車小屋跡、明治時代の異人館建物など様々な時代の遺構や遺物が確認された。現状では西岡本遺跡を考える上で調査の規模、遺存状況から判断される遺跡の内容を表す重要な調査として位置付けられる。

その後、第2次、第3次調査では古墳時代の遺構・遺物を中心として検出された。第2次調査では、5世紀中頃の前方後円墳と考えられる古墳の一部を検出、円筒埴輪の樹立痕や形象埴輪が確認され、盟主的な古墳の存在が指摘された。第3次調査では縄文時代早期～中世の遺構面が確認されたが、古墳時代中期の遺構であるSX01から「陶器系」の把手付碗とともに愛媛県松山平野を中心に分布する「非陶器系須恵器」と呼ばれる高杯が出土し、瀬戸内の海上交通を背景とした地域間交流を知る上で重要な発見となった。

第1～3次調査の成果から、当地が神戸市域において非常に古くから拓けた場所であり、住吉川左岸流域における中心的、かつ重要な地域であったことが想像された。



第3図 西岡本遺跡調査位置図 (Scale1:5,000)

本書ではその後に実施した本山浄水場内での3次にわたる上水道・浄水施設の新設工事に伴う調査の内容について記す。今回の調査では平安時代中期～中世初頭の遺物・遺構が確認された。西岡本遺跡における古代～中世の様相の一端が示された。

参考文献：

- 第1次調査 浅岡俊夫「神戸市東灘区 西岡本遺跡」六甲山麓遺跡調査会 2001
 第2次調査 富山直人「西岡本遺跡第2次調査」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1996
 第3次調査 西岡誠司「西岡本遺跡第3次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998

4. 本山浄水場内における発掘調査について

本山浄水場は昭和27（1952）年3月に竣工、開設された浄水場である。昭和25年4月に御影町、住吉村、魚崎町、10月には本山村、本庄村の現在の市街地東部地域が神戸市に合併され、各町村が保有した水源施設が神戸市に引き継がれた。

本山浄水場は住吉川を水源として急速ろ過場を新設し、既存の設備と併せて東灘低区へ給水することを目的とした。新たな取水設備は住吉川本流、本山浄水場のやや上流に位置する白鶴堰堤付近に設置し、導管を通して浄水場へ送り、処理後は新設、既設の配水管を用いて本山、住吉地区への配水を確保した。本山浄水場が建設された時期は、戦後復興期にあたり、急速に膨らむ市街地への十分な給水の確保が急務であった。

その後も水道事業は拡張を繰り返し、本山浄水場も送水隧道や既設・新設の配水池との接続を行うなどして拡充を図り、現在に至っている。

さて本山浄水場内における発掘調査は、いずれも浄水場内に新設される上水道及び浄水施設の建設に伴い実施した。平成13（2001）年・14（2002）年の調査は大容量送水管の敷設、平成19（2007）年の調査は新たな浄水処理棟（膜ろ過施設）の建設に伴う。

現在の本山浄水場の場内は、大きくは沈殿池が設けられた上段と管理棟、処理棟のある下段とかなり、その間に約3mの高差がある。3次にわたる調査は管理棟の北側から東側にかけての部分、本山浄水場内での北東隅の範囲で実施した。

なお、本書では便宜上、西側より上段、法面、下段調査区の順に新たに調査区名を付し、調査毎に付した遺構番号で重複するものをなくして通番とした。各次の調査概要を以下に記す。地区名の変更については下表第1表に記し、調査区の位置についてはP.8第5図に新調査区名（旧調査区名）で表記した。

旧調査区	調査主体	調査担当者	調査面積	調査期間	新調査区
第4次調査Ⅰ～Ⅴ区	神戸市体育協会	富山直人	216㎡	2001.07.23～10.22	5区
第5次調査区	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	80㎡	2002.07.01～07.25	3区
第6次調査1区	神戸市体育協会	藤井太郎	356㎡	2008.01.22～03.28	1区
2区					2区
3区					4区
4区					5区

第1表 新旧調査区対応表

第4次調査 原水池東の隧道内接合井から浄水場の北東角部に沿って敷設される管路部及び掘削堅孔部、南東道路側の工事中進入路部分の調査を実施した。本山浄水場内におけるはじめての調査である。管理棟の東に位置し、元々は官舎があった。南の工事中進入路部分（Ⅰ区）は官舎入口の階段や擁壁工事により損壊がひどかった。堅孔部分の逆L字形の調査区（Ⅱ区）で苑池状遺構と考えられる遺構の一部を検出し、範囲確認のトレンチを3本新設した。

第5次調査 第4次調査Ⅱ区に続く、浄水場北側の道路に接する調査区である。

第6次調査 沈殿池の東の上段から、現駐車場の下段にかけて新たに建設される浄水施設全域を対象とした。上段、法面、下段に大きく分割し、上段を東西に二分割（Ⅰ・Ⅱ区）、法面（Ⅲ区）、下段（Ⅳ区）の順に調査を実施した。上段は既存の埋設管が多数あることが判明していたが、稼働中の浄水場という性格上、埋設管の移設は難しく、既存の送水、電気関係の埋設管はそのままに、掘削可能な範囲において遺跡の状況の把握に努めた。また第4次調査Ⅱ区の一部、Ⅲ～Ⅴ区はすべてⅣ区に含まれる。苑池状遺構の状況の把握を主眼とした。

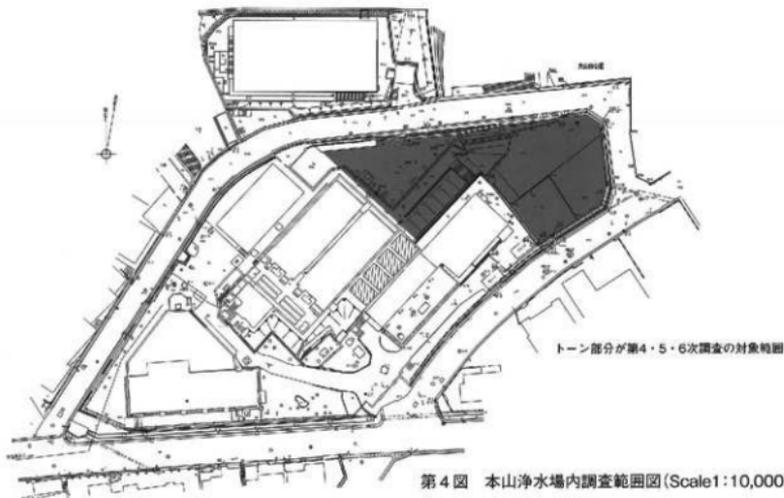
整理・報告書作成 3次にわたる調査出土の遺物を一括して整理作業を行う。接合、石膏補強、塗色復元を行い、遺物写真撮影を行った。遺構・遺物の検討を加え、報告書作成を進めた。



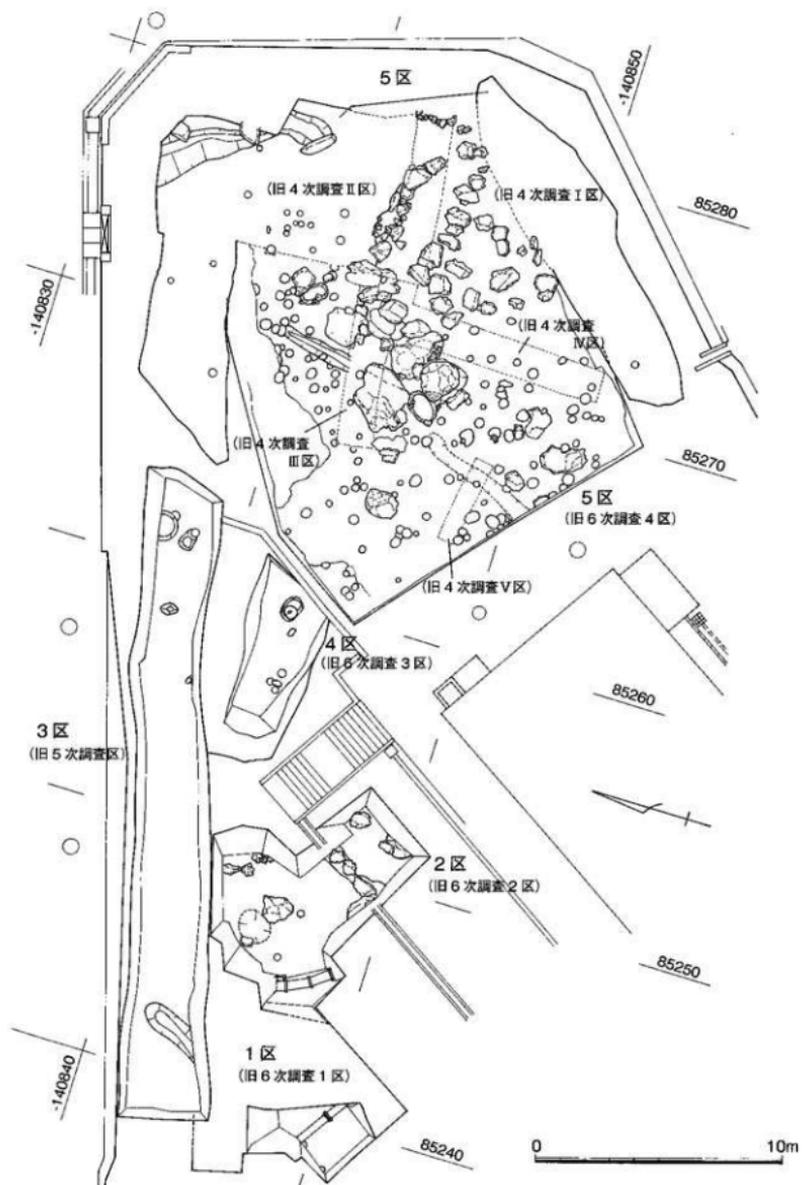
挿図写真1
調査作業風景



挿図写真2
整理作業風景



第4図 本山浄水場内調査範囲図(Scale1:10,000)



第5図 調査地 遺構全体平面図

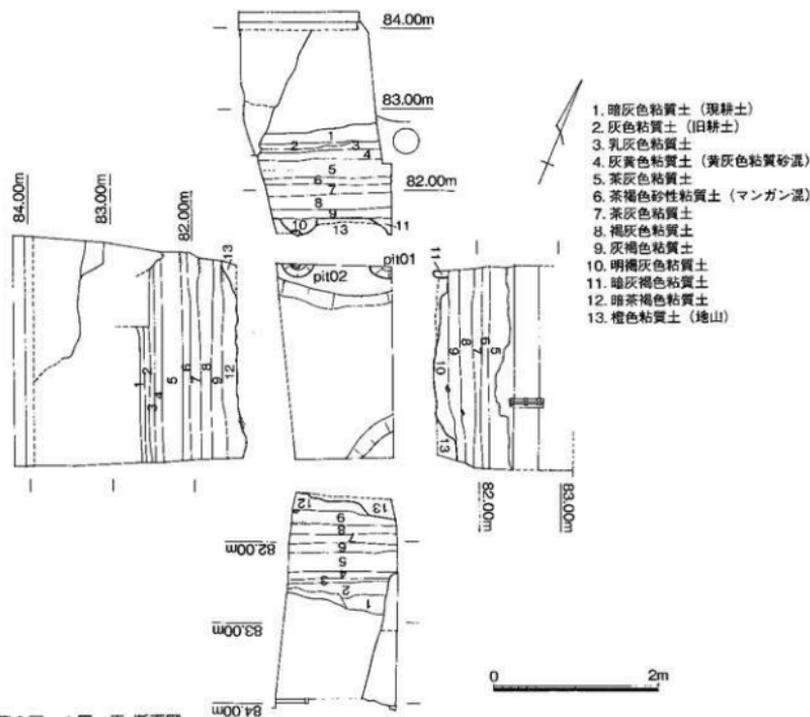
II. 調査の成果—検出遺構と出土遺物

1. 1区

上段西側の調査区である。コンクリート土間を除去し掘削を開始したが、稼働中の送水管、電気ケーブルが多数埋設されているため、遺構面まで掘削可能であった範囲はわずかであった。約2.5m×1.5m、底地面積約4㎡について調査を実施した。

調査区内の基本層序は盛土層、現耕土、近代～近世旧耕土、中世旧耕土の下に褐色系の色調を帯びる粘質土が複数層、水平堆積する。各層の上面は橙化、土壌化が顕著であるが、いずれの層面上でも遺構は検出されていない。この下、T.P.81.50m付近で黄褐色粘質土の地山となり、ピット2基と水みち状の窪みを検出した。

調査区北壁際、東側のPit01は直径約0.2m、深さ約0.2mで埋土は灰色砂質土である。小片の土器片が1点出土したのみである。1区での出土遺物は大半が中世旧耕土に含まれるが量的には少ない。複数の褐色系の粘質土からは1層あたり数点の土器片が出土するのみである。遺物の出土状況や褐色系の粘質土が水平堆積を繰り返すことから、付近は耕作地、あるいは平地でもあまり活用されていない場所であった可能性が高いと考えられる。



第6図 1区 平・断面図

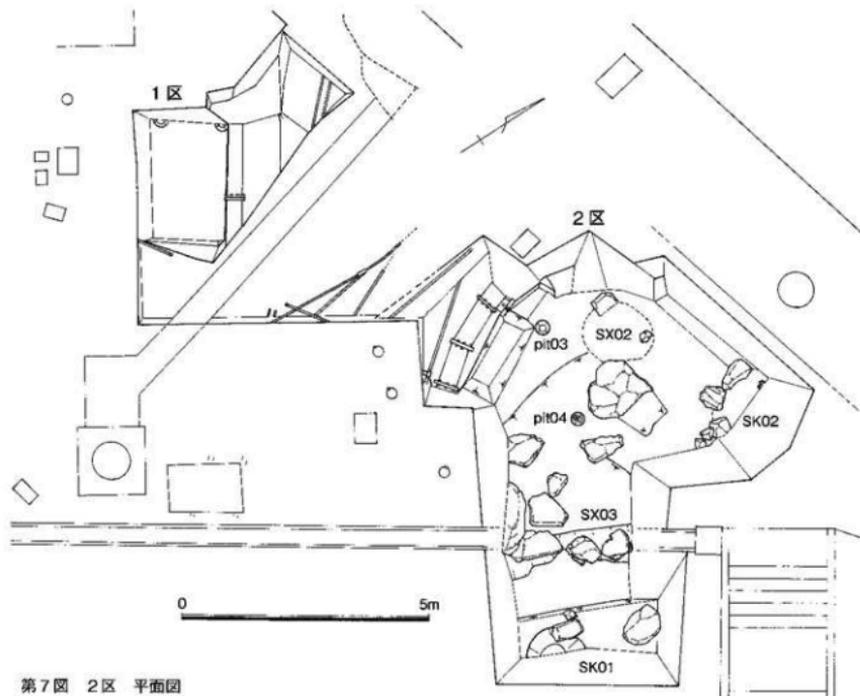
2.2区

上段東半を対象とした調査区で、埋設管による支障のない平坦部から管理棟側への法面部分約70mについて調査を実施した。1区同様、厚い盛土に覆われ、その下部に現耕土が堆積する。調査区中央の傾斜変換点を境に北側の傾斜部分には中世旧耕土、暗茶褐色粘質土の遺物包含層が堆積し、暗褐色粘質土、黄褐色粘質土の地山となるが、北端では現耕土直下で地山となり、削平が顕著である。南側も現耕土直下で暗褐色粘質土の地山直上の土壌化層となる。ピット2基、土坑(状遺構)3基、石列1基を検出した。

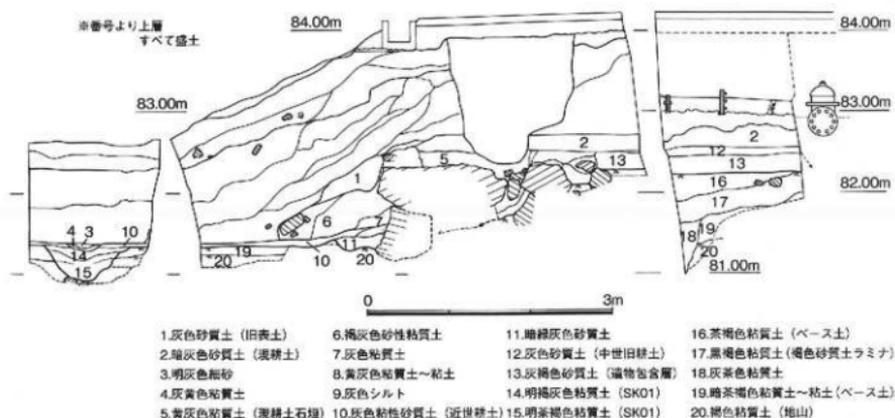
Pit02・03 いずれも直径約0.2m、深さは約0.1mである。埋土は灰褐色粘質土で小片の上器片が出土したのみである。

SK01 調査区南壁際で検出した土坑状の落ち込みで、直径1.0mほどに復元できる。深さは約0.5m、遺物は全く出土していない。壁面観察の結果、暗褐色粘質土面から掘り込まれており、この層面上が本来の遺構面と考えられる。

SK02 東端で一部を検出した。径約1.5mの円形に石が巡る土坑かと思われ内部を掘削したが、石を輪郭とする遺構ではなく、南東側へ落ち込む地形となった。深さ約0.5m、上層に灰色砂質土、下層に黒褐色粘質土が堆積し、上層に近世の陶磁器片を含む。下層からは須恵器、土師器のみが出土した。下層とした層は遺物包含層であったと考えられる。



第7図 2区 平面図



第8図 2区 土層断面図

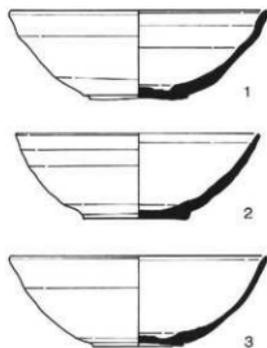
SX02

調査区北側中央に小礫が集中する部分があり、その周囲に人頭大の石が円を描くように巡る。小礫に混じて土師器、須恵器が小片の状態ではあるが比較的まとまって出土した。小礫の範囲は長径約1.5m、短径約1.2mで、周囲に砂の堆積が認められる。但し、前述したSK02同様、円形に巡る石の内部のみが明確な土坑状の落ち込みとなるのではなく、石を含む小礫群と砂層が全体にレンズ状に堆積することが、断ち割り調査の結果、判明した。東側には一辺2.0mを越す巨大な石を含む転石が集中しており、小礫、砂、石はこれらの転石に引っ掛かるような状態で堆積し、遺物も同様に集中したものと推測される。

出土遺物はいずれも小片であり、復元、図化できたものは1～3の須恵器碗のみである。口径14.8～15.2cm、器高5.2cm、薄い底部から体部はわずかに内湾しながら上方に延びる。1の見込みには凹みが残り、2とともに器壁には厚みがある。3は非常に薄い作りである。いずれの土器も焼成が甘く、器壁の磨耗がひどい。11世紀後半の遺物と考えられる。



挿図写真3 SX02検出状況(南東から)



第9図 SX02出土遺物

SX03

現在、上段平坦面と南側の法面との境に側溝が設けられているが、この側溝の真下約1.4mの位置で一部3段積みの石列（石垣）を検出した。調査区内での検出長は約2.5mで、その間に4個の石があり、最も大きな石の長軸方向の長さは約1.5mである。上段の石は現耕土層に、下段の石は近世の耕土層に覆われ、上下段では自然石あるいは切石と、使用する石の形態が異なっている。中世段階での状況は明らかでないが、近世以降はこの部分が段となって耕作地の区画として意識されていたものと考えられる。浄水場建設に際しても段状の地形が利用されたと考えられる。

3. 3区

第5次調査の調査区である。浄水場北側の道路に沿って設けた調査区で、大容量送水管の敷設部分を対象とした幅約3m、長さ約26mの東西方向のトレンチ状の調査区である。

調査区内には盛土、現耕土、近世旧耕土、中世旧耕土が堆積し、その下に暗褐色砂質土の遺物包含層が堆積する。中央から東は石垣を伴い現耕土が大きく落ち込む。遺物包含層の下、西側ではT.P.82.3m付近、東側ではT.P.80.4m付近で黄褐色砂質土の地山となり、傾斜地を形成する。溝状遺構1基、ピット4基、土坑3基を検出した。

SX04

調査区の西端で検出した幅約0.9mの溝状の落ち込みである。深さ約0.3mで調査区内での検出長は南北方向に約3.0mである。時期不明の須恵器、土師器片が出土した。

ピット

調査区の東端で数基検出した。掘形はいずれも円形で径は約0.3mである。建物などの並びとしては確認できなかった。須恵器、土師器、白磁片が出土した。

SK03

調査区東端の北壁沿いで検出した土坑である。北側さらに延びるもので、径約1.1mの平面円形の土坑になるかと考えられる。深さは約0.15mである。

SK04

SK03の南で検出した土坑である。平面形はやや重ながら隅丸長方形に近い形状で、長辺約0.8m、短辺約0.6m、深さは0.18mである。

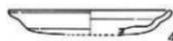


第10図 3区 東半平面図



いずれも埋土は暗褐色粘質土

第11図 SK03・04 断面図



4

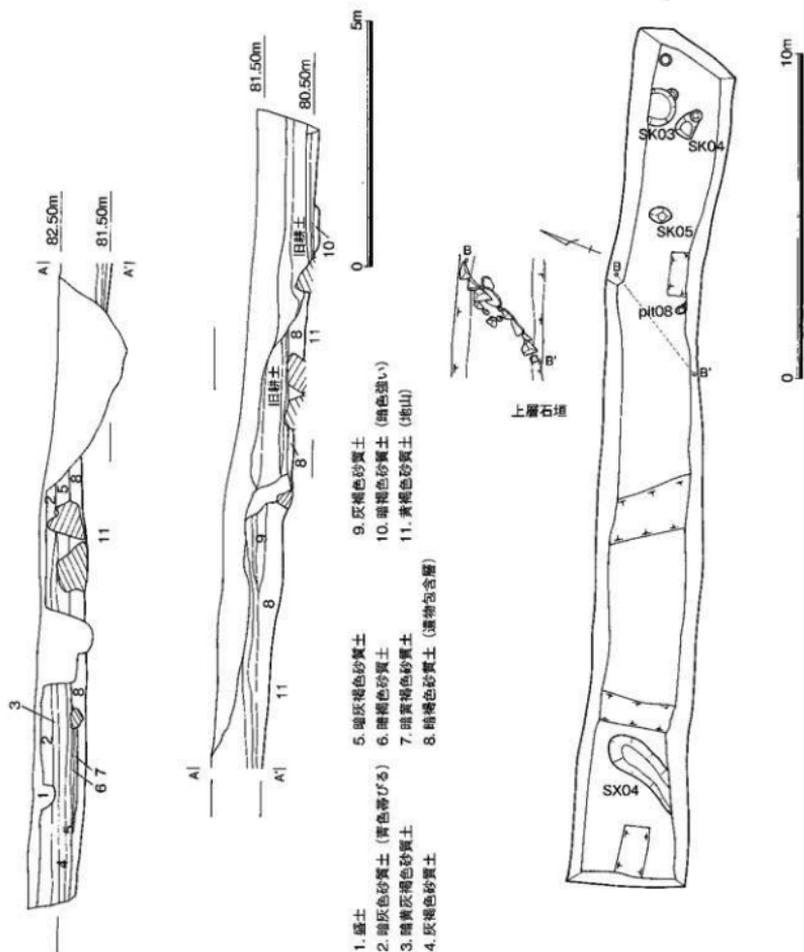


5



第12図 SK03出土遺物

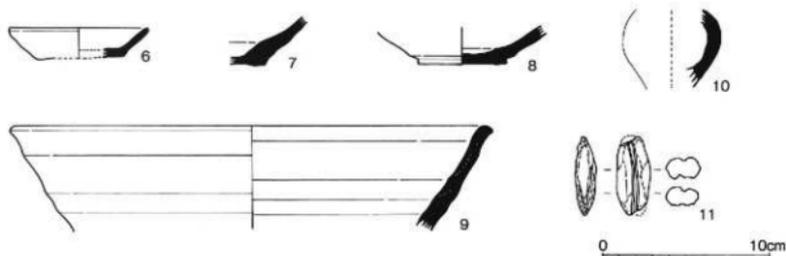
4・5は土坑埋土中から出土した土師器小皿でいずれも口径10.0cm、器高は1.2~1.4cmである。4は平底から屈曲した体部とそれに続く口縁部が斜め上方に延びる。5は口縁部のみがわずかに屈曲する。「て」字状口縁の皿であるが、口縁端部はいずれも丸く収める程度で内傾は強くない。体部下半はエビオサエ、上半はヨコナデ調整である。全体に磨耗がひどく、焼成は甘い。11世紀末の遺物と考えられる。



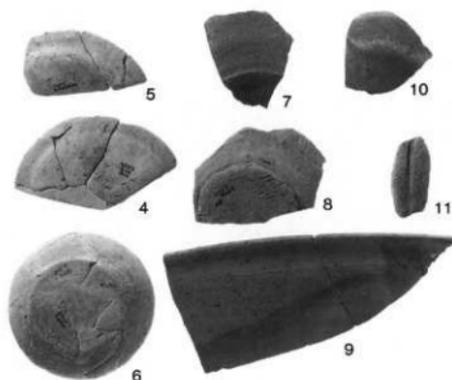
第13図 3区 平・断面図

SK05 長径約0.7m、短径約0.5m、深さ0.18mの平面楕円形の土坑である。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は出土していない。

遺構に伴わない遺物 6は遺物包含層の直上から出土した須恵器小皿で径8.0cm、器高1.0cmである。底部は回転糸切り未調整で、平底から強く屈曲し口縁まで直線的に斜め上方に延びる。7・8は須恵器碗の底部片で復元底径5.2cm前後、底部は回転糸切り未調整である。見込みの凹みはほとんど認められない。9は須恵器の捏ね鉢で復元口径29.0cm、残存高5.6cmである。口縁部はわずかに外側に折り曲げられる。全体に回転ナデを施した後、部分的にナデ調整を行う。10は須恵器の小壺、体部と考えられる破片である。胎土は精良で焼成は堅緻である。体部上方、肩部で最大幅となるようで幅は5.5cm前後と考えられる。11は土師質の有溝土錘で上下端がわずかに欠けるが、長さは約5.0cm、最大幅2.0cmである。厚さ1.2cm、溝の幅は4mmである。7～11はいずれも遺物包含層からの出土である。全般に当調査区からの遺物の出土量は少ないが、これは後世の耕作などにより遺物包含層がほとんど残らなかったことによるものであろう。12世紀前半までの遺物が出土している。



第14図 3区 遺構に伴わない遺物



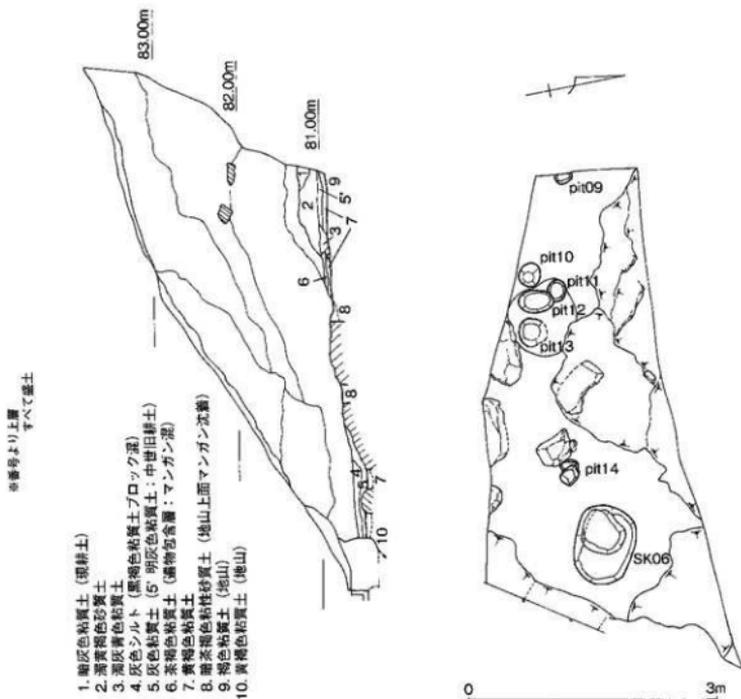
挿図写真4 3区 遺構に伴わない遺物

4. 4区

第6次調査の3区である。上段の東端から下段への法面部分を掘削した調査区である。浄水場建設時より繰り返し行われた掘削や盛上による整地の結果、地形が大きく改変されていた。調査区西端の盛土下にわずかに現耕土層があり、その下部に遺物包含層である暗褐色粘質土が薄く残る部分がある。東側は盛土下で小礫や転石の多く混じる地山面となり、地山面は下段の現地表とほぼ同一レベルである。ピット6基、土坑1基を検出した。

ピット

直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.3m、いずれも暗灰褐色の粘質土を埋土とする。中央やや西寄りに4基のピットが集中するほかは疎らな感がある。4基のピットの周りは土壌化し、円形の浅い皿状の窪みとなっていた。後述する5区からの柱穴の延びによりPit13及びSK06内の窪みが建物を構成する柱穴になるが、その他のピットについては不明である。



第15図 4区 平面断面図

SK06

調査区東端で検出した長径約1.0m、短径約0.7mの平面楕円形の上坑である。深さは約0.1mで、北側の一部が深さ約0.2mで周囲よりわずかに深くなっており、遺物検出及び掘削の段階では明らかにできなかったが、5区で検出した柱穴から延びる掘立柱建物を構成する柱の並びに符合することから、この部分は柱穴であったと考えられる。土坑内からは須臾器、土師器が出土したが、いずれも細片で、詳細な時期は不明である。

5. 5区

浄水場内の東端に位置し、現状で管理棟などの建物と同レベルの平坦面に位置する。平成19年度の第6次調査の段階では第4・5次調査の調査原因となった大容量送水管敷設工事後に駐車場として整備されていた。平成13年度の第4次調査の調査区（I～V区）と平成19年度実施の第6次調査の4区を合わせて本書では5区とした。以前は官舎があり、南東部は官舎への入口階段や擁壁の工事の際に大きく掘乱されていたことが第4次調査I区の調査で確認されている。

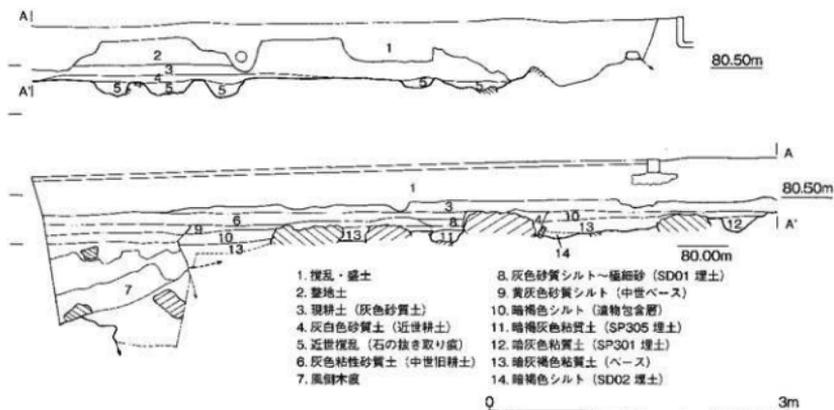
調査区内の基本土層は整地層・表層、盛土層、現耕土層以下、近世～近代の旧耕土、中世旧耕土、(暗)褐色シルト(遺物包含層)の順に堆積し、暗褐色粘質土(土壌化層)、暗灰褐色砂質土(土壌化層:上面ベース面)、黄褐色粘質土(ベース面・地山層)と続く。

調査区内は北西から南東方向へ下がり地形となっており、地形的に高い調査区の北西部では後世の耕作などに伴い削平が進み、近世旧耕土下で黄褐色粘質土の地山面となる。

調査区壁面の土層観察の結果、一部の遺構は地山直上の暗灰褐色砂質土上面から掘り込む状況が確認されたが、大半の遺構の埋土は同様の暗褐(灰)色を基調とするものであり、精査を繰り返した結果、黄褐色粘質土の地山面まで掘き取りを行った段階で遺構の形状を把握することを得た。

また調査区の中央から南半分については地山面に東西方向の土石流の痕跡があり、管状に転石が露頭する。一辺2.0mを越す大きな転石も含まれ、遺構はこれらの石の影響を受けながら形成される。遺物を含む(暗)褐色シルト～粘質土は南東方向へ厚く堆積し、地山面はそれに応じて下がり地形となる。

検出遺構は掘立柱建物6棟のほか土坑3基、溝2条、落ち込み1基、柱穴・ピット多数である。



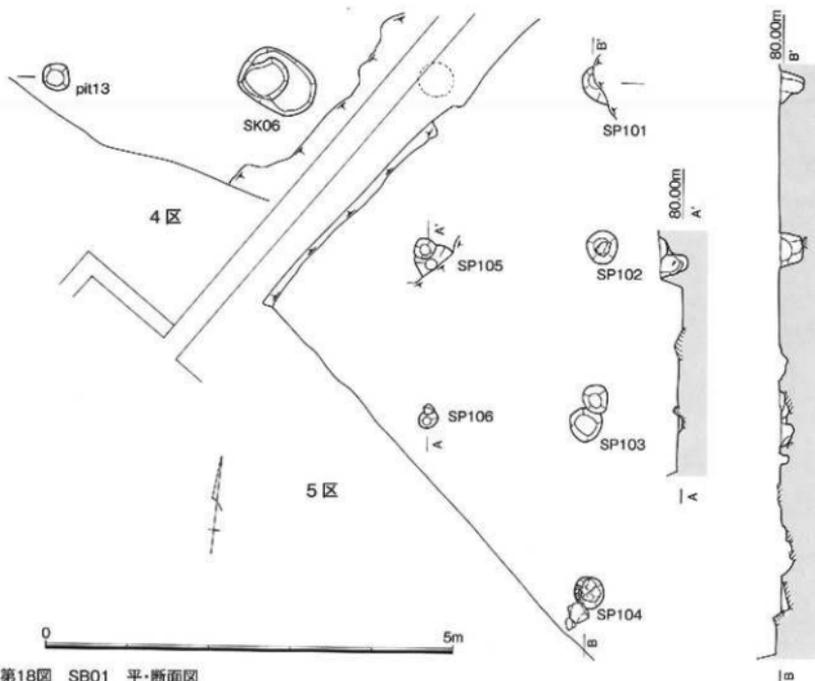
第16図 5区 調査区断面図(西壁)



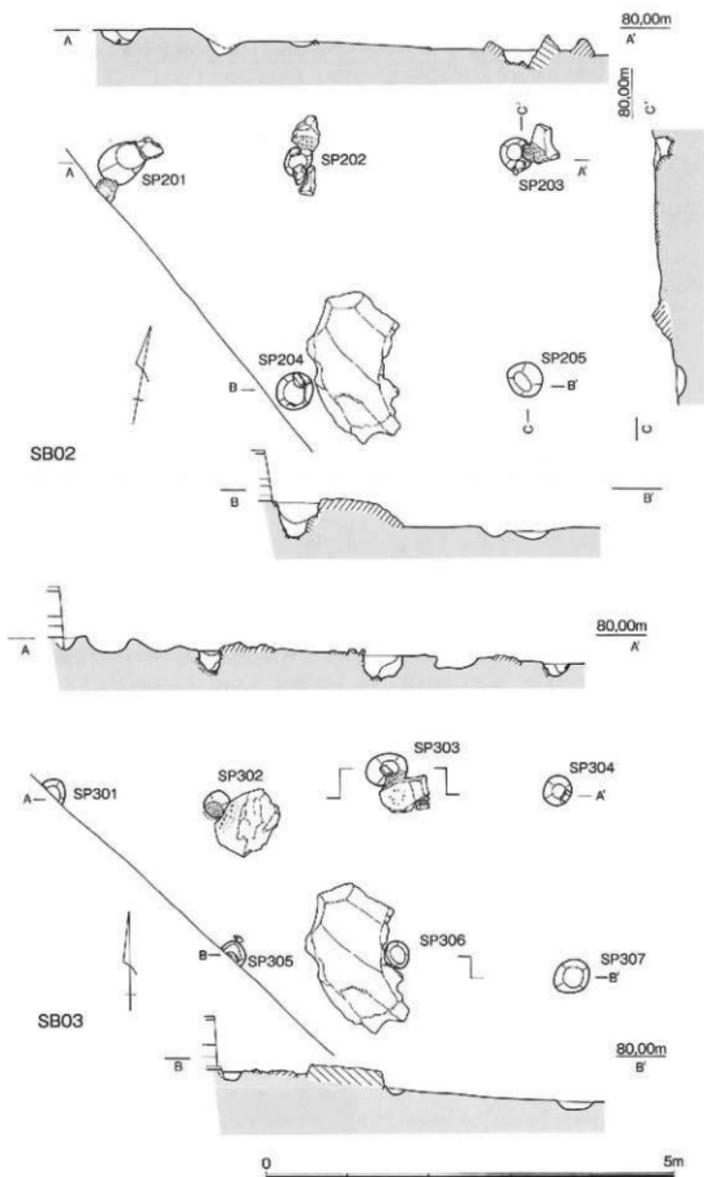
第17图 5区 遺構平面図

(1) 掘立柱建物

- SB01 調査区の北西部から4区にかけて検出した東西3間以上(6.7m)×南北3間以上(6.2m)の建物である。柱間は2.0~2.4mで、柱の直径は0.2~0.4m、深さは0.1~0.3mである。南側の柱穴は後世の削平によりわずかに残る程度を確認した。掘形の底はほぼ同レベルで掘削されている。須恵器、土師器が出土したがいずれも小片である。
- SB02 調査区南隅に位置する東西2間以上(4.8m)×南北1間以上(2.8m)の建物で、南と西側にそれぞれ拡がる可能性をもつ。SP202~205の各柱間は2.5mであるが、西端で検出したSP201へは2.2mとやや狭い。柱の直径は0.3~0.5m、深さは0.1~0.2mである。転石が多く、SP205を除くその他の柱穴に接する石の表面には、柱を据えるために表面を削ったと思われる痕跡がある。柱穴からの出土遺物はほとんどなく、詳細な時期は不明である。
- SB03 調査区南隅で検出した東西3間以上(6.2m)×南北1間以上(2.2m)の建物である。柱間は1.8~2.3mで北側の柱列SP303がやや北側に逸れる。柱の直径は0.3~0.5m、深さは0.1~0.5mとばらつきがあるが、これは南側での検出レベルが低くなったためである。SP302・303に接する石には表面を削った痕跡が認められ、SP303は結果的に石の影響のより少ない北側に柱穴を設けたと考えられる。位置や方向性からSB02と重複する建物と思われるが、切り合い関係はなく、出土遺物も乏しいため前後関係は不明である。



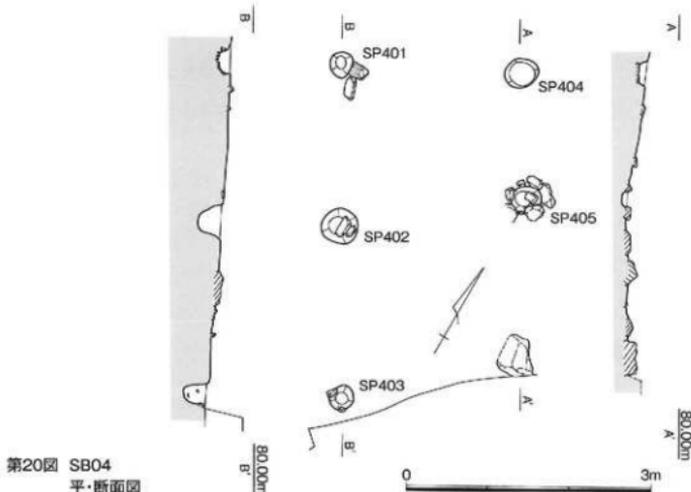
第18図 SB01 平・断面図



第19圖 SB02・03 平・断面圖

SB04

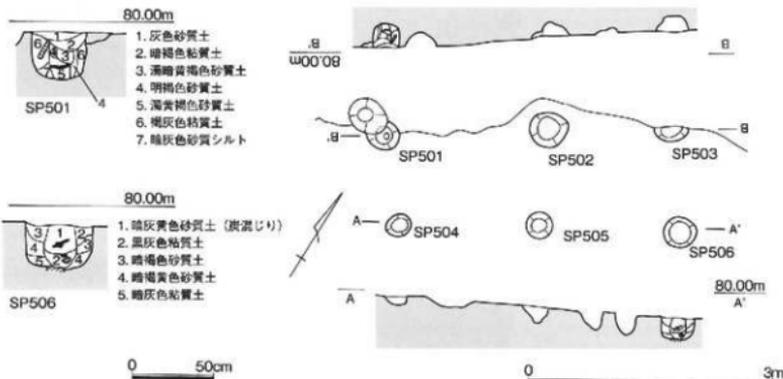
調査区中央南寄りで見出した東西1間(2.2m)×南北2間(4.2m)の建物である。柱の直径は0.3~0.4m、深さは0.1~0.3mである。準大の転石が多い範囲にあり、柱間は1.8~2.2mと幅がある。SP405を除く柱穴から遺物が出土したが、いずれも小片である。



第20図 SB04
平・断面図

SB05

調査区北端に位置する建物で、調査では南北1間(1.2m)×東西2間(3.5m)分を確認していた。その後の復元作業において東側に南北方向の柱の並びを確認した。柱間が1間抜がるか、あるいは柱間が狭いため横列(SA03)の可能性もある。東西2間の柱間約1.8m、南北約1.3m、柱の直径は0.3~0.5m、深さ0.1~0.3mである。SP501・506の埋土には炭が混じり、周辺にも薄い炭の層が広がる。柱穴から須恵器、土師器などが出土した。

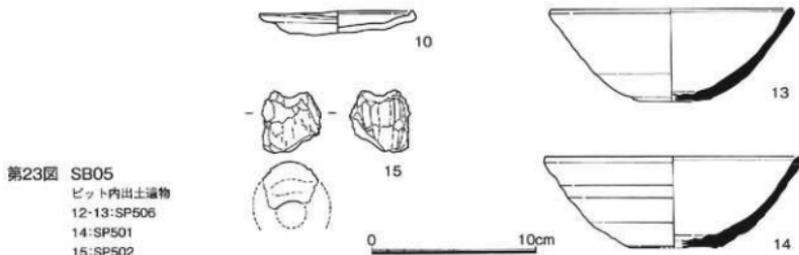


第21図 SB05 平・断面図



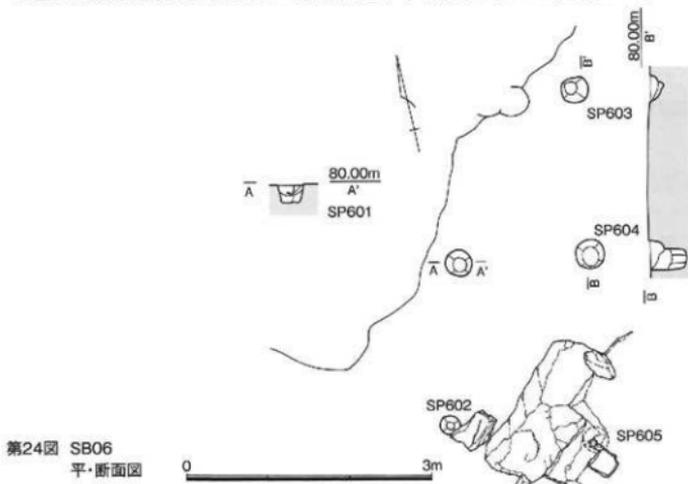
第22図 SP501・506 断面図

12・13はSP506から出土した。12は「て」字状口縁の土師器小皿で口径9.6cm、器高1.4cm、体部内外面ともユビオサエで部分的にナデを施す。口縁端部は上に積み上げ、ヨコナデを施す。13は須恵器椀で口径15.0cm、器高5.6cm。底部からの立ち上がりはやや丸みを帯びるが、体部は直線的に口縁部まで延びる。磨耗がひどい。14はSP501から出土した須恵器椀で口径15.6cm、器高5.5cm、底部は回転糸切り未調整、わずかに内湾しながら上方に延びる体部は回転ナデ調整のみである。15はSP502から出土した輪羽口片で残存長3.9cm、最大幅3.6cm、復元すると外径5.0cm、内径2.0cmほどになろうか。胎土には長石、石英、クサリ礫を多く含む。外面は被熱のため灰色や紫色に変じている。



SB06

SB05の西側に位置する建物である。東西1間(1.7m)×南北2間(2.2m)の建物で、南北の柱間は約2.0m、東西の柱間は約1.8mである。柱の直径は0.2~0.4m、深さは0.2~0.5mである。調査では南北1間分を確認していたが、その後の復元においてSP602からの1間の延びを確認、南北2間の建物と考えられる。SP605とした部分は、一辺2.0mを越す転石の上に位置するが、人頭大の石とその傍から須恵器の椀底部が出土しており、転石の一部が窪み、黒褐色粘質土が堆積していた状況などからも柱穴であったと推測される。

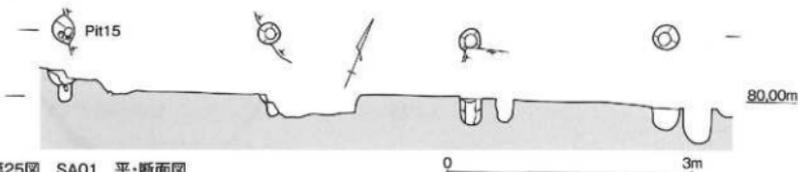


(2) 欄列

SA01

東西方向の柱列で、対応する柱の並びがないことから欄列とした。3間分を検出した。西端に位置するPit15は直径約0.3m、深さ約0.3mで、土師器小皿片が出土した。

現地での調査ではSA01のみを確認していたが、その後、先のSB05に伴う欄列の可能性のあるものを含めて4列の欄列の可能性のある柱の並びが復元できた。建物群と軸方向を同じくする組み合わせがあり、それぞれに関連するものと考えられる。

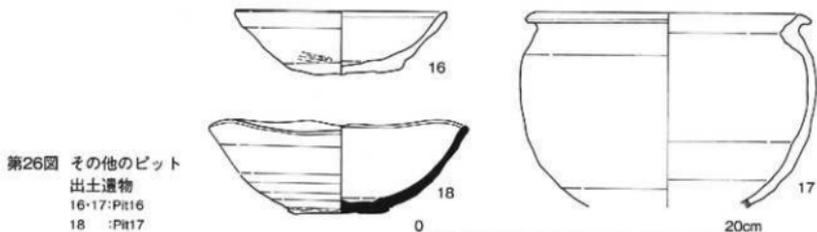


第25図 SA01 平・断面図

(3) その他のピット

建物に復元したものの以外にも径0.2~0.4m、深さ0.2~0.3mのピットを多数検出した。ピット出土の遺物は少ないが、SB05の柱穴あるいは欄列のピットと考えられるPit16からは土師器の碗、甕が出土した。16は口径13.0cm、器高4.0cmの碗で、体部下外面にユビオサエとやや強いナデの痕跡と、底部外面に工具によるナデ状の圧痕が残る。17は口径18.0cmの甕で、肥厚化した頸部は「く」の字に強く屈曲し、口縁端部は外側に面をつくる。18はPit17出土の須恵器碗で復元口径15.2cm、器高5.2cm、焼け歪みが生じている。

概観すると調査区の北東部で検出したピットにやや遺物が多く含まれる傾向がみられる。この範囲は転石の露頭が少なく、周囲に比べると建物を構築しやすかったのであろうか。



第26図 その他のピット

出土遺物
16・17:Pit16
18 :Pit17

(4) 溝

SD01

調査区の中央で検出した幅約0.6m、深さ約0.2mの南北方向の溝で、調査区内での検出長は約12mである。等高線の形状に沿うようにやや弧を描き、この溝を境に北側の上段では現耕土あるいは近世耕上下で地山面となる。南側では傾斜下方に中世旧耕土及び遺物包含層が遺存する。溝の埋土は中世耕土層に類似し、部分的に砂の混入も認められる。19は口径8.0cm、器高2.2cmの須恵器小皿である。底部は回転糸切り未調整で、厚みのある体部、口縁端部はやや外反する。



第27図 SD01出土遺物

SD02

中世の旧耕土層、遺物包含層を除去した地山面で、やや南に位置するがSD01とほぼ同様の溝状の窪みを検出した。この位置が土地利用の上で地形の変換点として継承されていた状況が分かる。溝の規模は幅約0.6m、深さは約0.15mである。埋土は暗灰褐色粘質土で、東側では砂の堆積も認められた。須恵器、土師器、白磁片の小片が出土した。

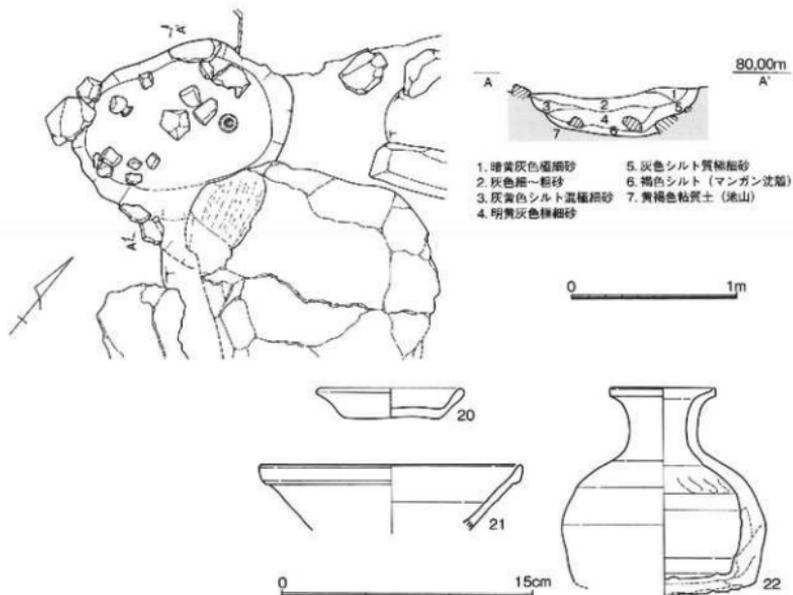
(5) 土坑

SK07

調査区の中央で検出した長径約1.4m、短径約0.8mの平面楕円形の土坑である。遺構の深さは約0.3mで、埋土の大半は灰(黄)色系の極細砂～細砂～粗砂である。埋土が砂のためか鉄分が多く、土坑底の礫にはマンガンの沈着が認められる。須恵器、土師器、白磁片、灰軸陶器などが出土した。

また土坑の東辺の一部は巨大な花崗岩の転石の露頭部に接するが、土坑の輪郭に沿って石の一部に削られた痕跡が認められる。風化が顕著なため明確でないが、何らかの工具により土坑を掘削する際に石の表面を細かく削ったものと推測される。この加工痕は石の上方に延びており、本来は検出面よりもさらに上方から掘削されていたと考えられる。

20は口径9.0cm、器高1.8cm、橙褐色を呈する土師器小皿である。直線的に延びる口縁の端は厚く丸みを帯びる。21は白磁碗で口径16.2cm、残存高4.0cm、玉縁状の口縁断面は三角形で斜め下方に膨らむ。22は灰軸陶器の壺で底部を欠損する。残存高は12.0cmで、体部下半は厚みがある。頸部は垂直に立ち上がり、口縁は外側に水平に開いた後、端部を上方に軽く摘み上げる。ほとんど剥落しているが肩部に淡緑黄色の釉薬が残る。

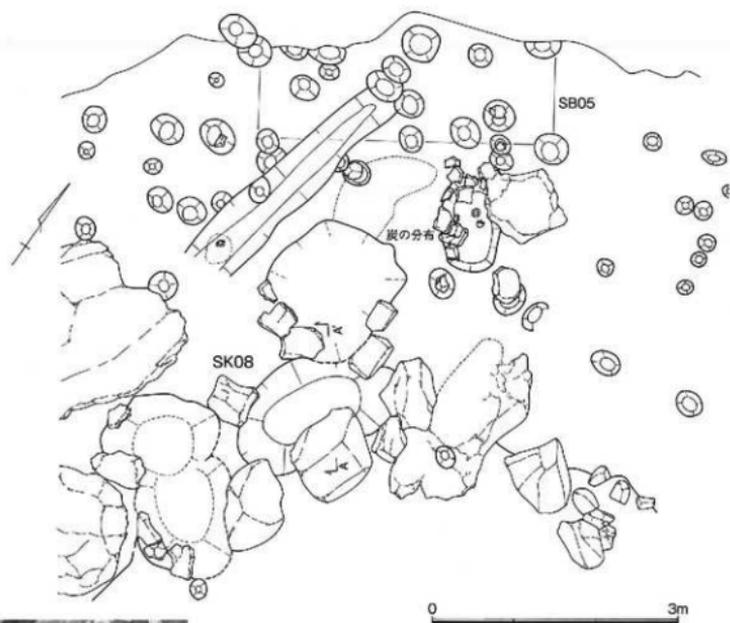


第28図 SK07 平・断面図及び出土遺物

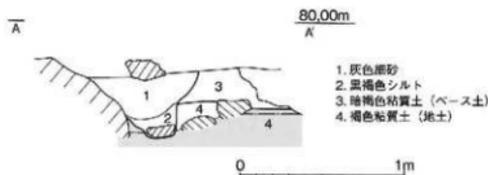
SK08

調査区中央で検出した長径約2.0m、短径約1.3mの平面楕円形の土坑である。断面の形状は緩やかな漏斗状で、埋土の上層には灰色の細砂が堆積する。大型の石の間を掘り抜いた状態で、周囲には黄褐色の細砂～粗砂や転石が堆積しており、これらの一連の大きな堆積の一部、あるいは最終埋土ではないかと考えられる。砂層の分布はSK07から東側一帯に認められる。位置的には後述する落ち込みSX01の最奥部にあたる。

23～25は土師器皿で23は口径8.6cm、器高1.2cmの「 Γ 」字状口縁の皿である。24・25は口径14.0～14.4cm、器高2.3～2.6cm、体部下半はユビオサエとナデ成形、口縁部は強いヨコナアを施し、先端部は外反する。色調は乳褐色である。26・27は須恵器椀で底部など一部を欠く。口径は16.0cm前後でやや内湾しながら延びる器壁は厚手である。口縁端は丸く収める。28・29は須恵器の底部で28は椀、29は鉢の底部と思われる。28は底径5.2cm、接

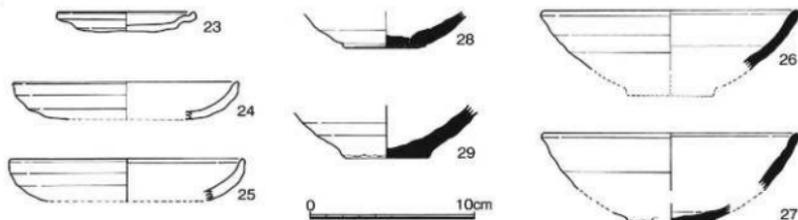


挿図写真5 SK08断面(東から)



第29図 調査区北東部平面図及びSK08断面図

合が不十分なためか円盤状の粘土板を押し込んだように見える。底部内面はユビオサエとナデ調整、底部外面は回転糸切りの後、周囲をナデ仕上げする。



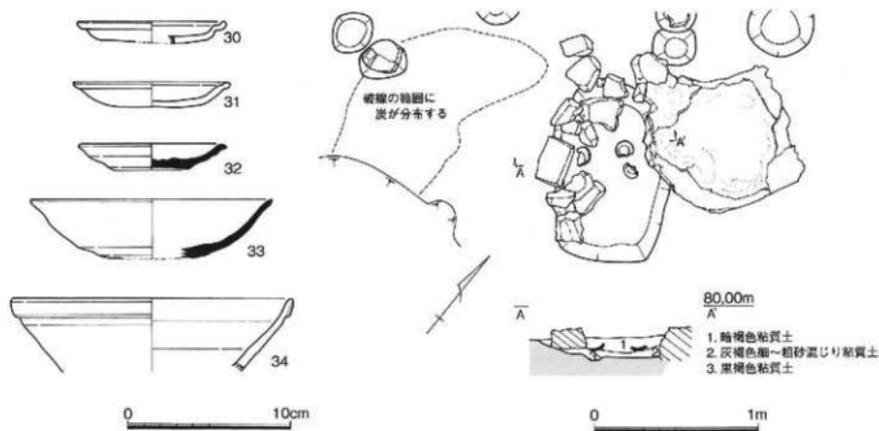
第30図 SK08出土遺物

SK09

調査区北東端で検出した長辺約1.0m、短辺約0.8mの平面長方形の土坑で、深さは0.2～0.3mである。土坑の東肩は転石に沿う。検出段階において土坑の上面や転石の周囲に炭の分布が認められた。西肩に沿って巡る石は埋土中に含まれ、東肩の花崗岩を割った際の石屑と思われる石質の似た、鋭利な縁をもつ破片や、粗いながらも直方体の形状になった石を含む。採石土坑の可能性ある。須恵器小皿1点、土師器小皿2点などが出土した。

30・31は「て」字状口縁の土師器小皿で、31は口径9.2cm、器高1.4cm、体部、口縁部ともに屈曲が強い。31の口縁は外側に開くが端部の摘み上げは緩い。32は須恵器小皿で口径9.2cm、器高1.7cm、底部外面は回転糸切り未調整である。上方に開いた体部はシャープな作りで、口縁端部は外側に面をもつ。33は須恵器碗で口径14.6cm、口縁部は薄い作りで外反する。34は白磁の碗で、玉縁状の口縁部はほとんど厚みをもたない。

調査区内ではこの他にも、露頭する転石の一部を削る、あるいは割った痕跡が確認されており、石の周囲が掘り窪められ土坑状になるものがある。



第31図 SK09 平・断面図及び出土遺物

(6) 落ち込み

SX01

調査区南東端に位置する落ち込みで、規模は南北の検出幅約70m、調査区内での検出長は東西約110mである。SB04検出面付近から下がり地形となり、第4次調査区と第6次調査区が重なる境目付近のやや南寄り最も深くなる。検出範囲内での最深部の深さは約1.4mである。拳大の礫から一辺(径)1.0mを越える規模の石が堆積し、石の隙間には遺物を含む流れ込みの土砂が堆積する。

内部の堆積は暗灰色、暗褐色、黒褐色の色調を帯びる暗色系の埋土で、砂、砂質の強いシルト層、粘質土が互層となっている。下層では大型の石の占める割合が多く、石は疎らに出土する。遺物は上・中層よりは少ないが、底地にできた砂を含む溜まり状の部分などから出土する。中～上層では大きな石に混じって小振りの石(礫)が多く含まれる。拳大程度の石から人頭大の石まで様々で、上から流れ込み、点在する巨石に堰き止められたような状態で出土する。それらの石に混じり、細片ではあるが遺物が多量に出土する。

落ち込みの縁辺部、遺構検出面近くでは大型の石がやや弧を描くように検出されるが、これは周囲から落ち込んだもので、一部には手の加えられたものもあるだろうが、基本的には並べ、または積み上げるといった造作は少ないものと思われる。その内部に新たに土や遺物が集積する状況が繰り返行われている。最終埋土は掘り鉢状に堆積した暗褐色粘質土で、そこに粗い砂が混じる。この砂は谷状の落ち込みの西側奥部、SK08あたりに集中しており、SK07も含めてこの近辺にのみ堆積する。

SX01の最終埋土上面には中世の耕土層が堆積し、埋没後は耕作地となった様子が窺え、さらに中世耕土層の上には地山土をブロック状に含む整地層と近世の陶磁器を含む新たな耕土層が堆積する。中世旧耕土の上面で一部の転石は頭を出しており、さらに近世の耕土層のレベルでも巨大な転石の一部は頭をのぞかせていた。いくつかの転石の周囲には輪郭に沿って浅く掘り窪められたものや、石の根元近くまで掘削されたものがあり、それらの落ち込みは中世、あるいは近世の耕土層で埋没していた。それぞれの段階で耕作の障害になる石を除去しようと図ったか、あるいは採石を目的として掘削したものと思われる。

調査区の南西側も人頭人までの大きさの転石を含む土流の痕跡が認められるが、急激な傾斜地形とはならず、段丘下位へ緩やかに続く下がり地形を形成するものと思われる。

出土遺物

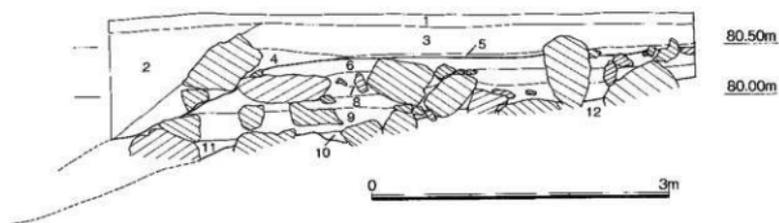
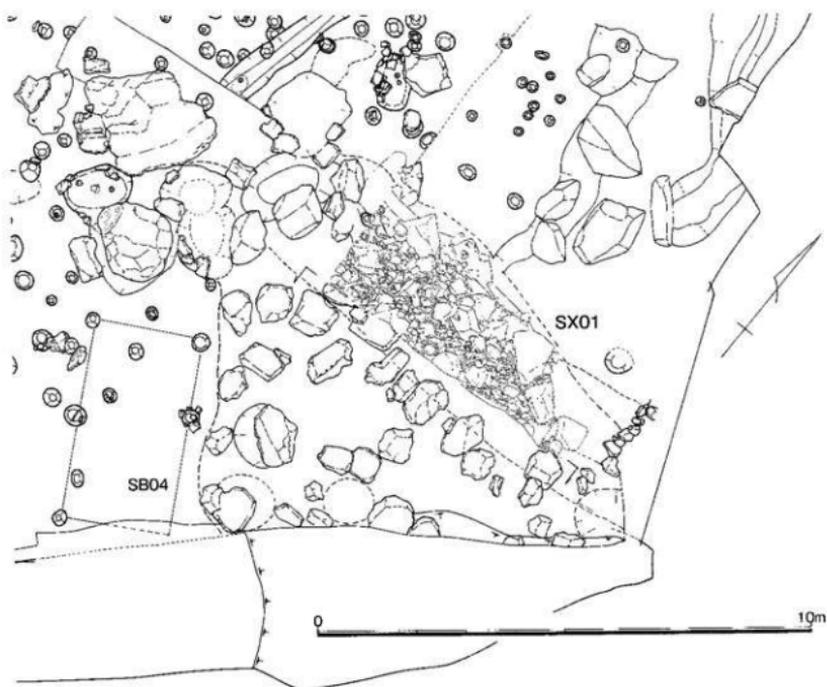
落ち込みに堆積した土の中からは転石に混じって土師器、黒色土器、須臾器、白磁などがそれぞれ細片ではあるがまとめて出土している。出土量は28ℓ入りコンテナで6箱分を数える。平安時代中期～中世初頭にかけたものである。

土師器

土師器では皿を中心に、椀、甕、鍋、羽釜、土釜などが出土している。

35～63は土師器の皿である。35～58は小皿で、口径(復元含む)8.4～10.4cm、器高1.2～2.1cmである。

35～46は「て」字状口縁の小皿である。35は平底から垂直に折れ曲がる体部で、口縁は水平に延びたのち端部を玉縁状に丸める。口径10.4cm、器高1.2cmで、色調は淡橙褐色を呈する。36は体部の屈曲は弱い。37は口径9.4cm、器高1.5cm、やや小振りであるが口径に比して器高が深く、口縁端は非常に薄い。38は水平に折り曲げた口縁の下に工具匠痕と考えられる痕跡が沈線を描く。口径10.0cm、器高1.5cm。変形が激しい。39の口縁端部はあまり



- | | | |
|---------------|-----------------|-----------------|
| 1. 旧粘土 | 6. 暗灰褐色シルト | 11. 灰褐色シルト混中～粗砂 |
| 2. 黄灰色シルト混中～砂 | 7. 暗灰色シルト混中～細砂 | 12. 暗灰色シルト混中～細砂 |
| 3. 灰色シルト混中～細砂 | 8. 黒褐色細砂混シルト | 13. 明褐色シルト混細砂 |
| 4. 黄褐色シルト | 9. 黒灰色シルト (灰含む) | |
| 5. 褐色シルト | 10. 暗褐色シルト | |

第32図 SX01 平・断面図

水平には開かず、上方に摘み上げて小さく収める。器壁は非常に薄い。

40～47はやや器壁の厚いタイプの小皿である。40は口径9.8cm、器高1.4cmで体部の屈曲は弱い。口縁は水平に開き、端部の丸みは明瞭な玉縁となる。41は体部上半から口縁部にかけての器壁が厚く、口縁部はどっしりとした印象を与える。42・43は口縁端部をわずかに上方に摘みあげ、外側に面をもつヨコナデ成形を施す。44・45の口縁端部は強いヨコナデを施すことにより内側に沈線状の凹みが認められる。43～45の底部の調整はユビオサエと部分的なナデで、やや尖り気味になる。46は体部上半の器壁が厚めである。底部内外面ともユビオサエの痕跡が顕著である。47は口径8.4cm、器高1.2cmと非常に浅い。口縁端部は下方に折り曲げた形状になる。48は強いヨコナデ成形で口縁部が大きく外反する。口径9.6cm、器高1.6cm、色調は赤褐色を帯びる。

49～53は平底から体部がやや内湾しながら立ち上がる皿である。49は口径9.8cm、器高1.8cm、口縁下に強いヨコナデにより段ができる。50もわずかに口縁下に段ができる。52は底部内面にわずかにユビオサエの痕跡がみられる。53は口径9.4cm、器高1.4cm、浅い皿である。色調は淡乳褐色。底部外面に工具によるナデ痕跡が認められる。

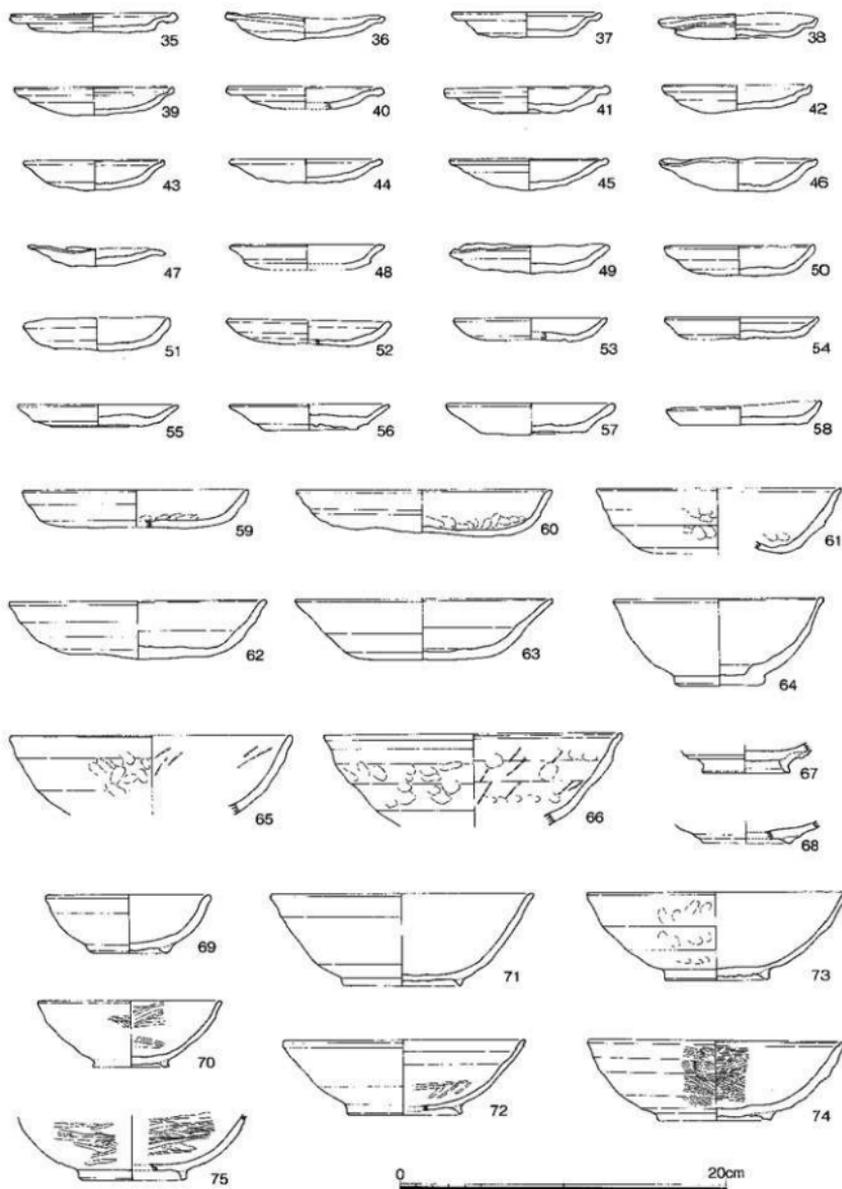
54～58は底部立ち上がりから体部、口縁が直線的、またはやや外反し延びるものである。54は口径9.6cm、器高1.4cm、底部内面ユビオサエ、外面には工具による圧痕がある。口縁端部がわずかに内側に丸く折れる。55の底部は回転ヘラ切りの後ナデ成形である。強いヨコナデにより底部立ち上がりに段ができる。56の底部外面には切り難しのヘラ状工具痕を残す。57は口径10.2cm、器高1.9cm、剥離のため明確ではないが、底部外面回転糸切りの可能性のある皿である。体部は薄く、口縁はやや肥厚化し、丸く収める。58の薄く平らな底部の外面は回転糸切りである。口縁の立ち上がりは低く短い。

59～63は口径15cm前後の皿である。59は口径13.6cm、器高2.4cm、底部内外面にユビオサエの痕跡がある。強い二段ナデにより体部立ち上がりに段ができる。60にも底部から体部内面の立ち上がりにユビオサエの痕跡が顕著に残る。口縁端部はやや鋭角なヨコナデ成形。61は口径15.0cm、器高4.0cm、体部下半はユビオサエ、口縁部は二段ナデである。底部が凹む。62の色調はやや赤みを帯びた淡褐色で、口縁部は強いヨコナデ成形である。63は口径15.6cm、器高4.7cm、底部外面は回転糸切り未調整、回転ナデにより体部、口縁は薄く外方に延びる。

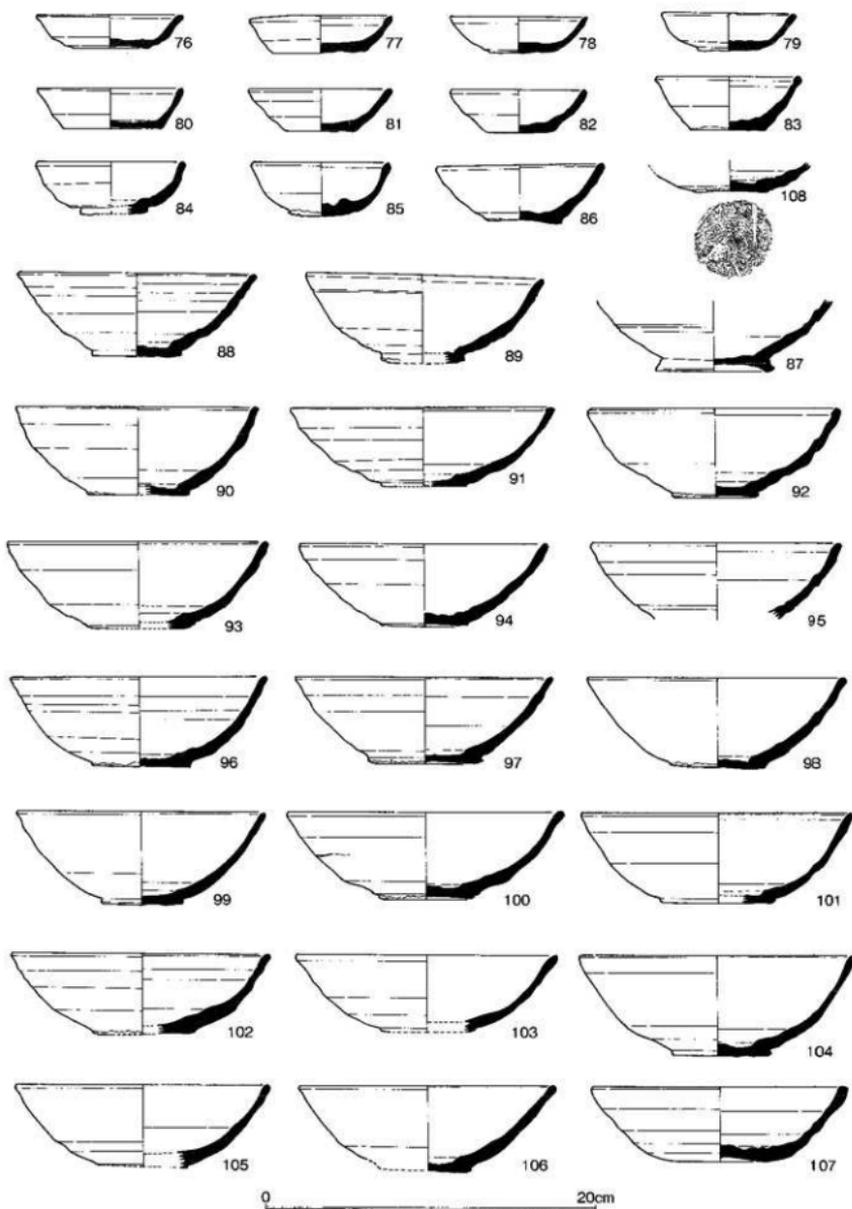
64は碗で口径12.6cm、器高5.3cm、底部は回転糸切り未調整、その他はヨコナデ成形である。底部見込みの凹みが顕著である。底部に比して体部の器壁は薄い。

65・66は碗で、体部内面にはユビオサエの他にヘラ状工具によるナデ痕が認められる。66は茶褐色の色調を帯びる土師質の土器で、胎土に長石、金雲母を含む。口径18.2cm、残存高5.3cm、ユビオサエと工具によるナデ上げ痕が顕著で、口縁部内側には強いヨコナデにより沈線状の段ができる。搬入土器と考えられる。67は66と同様の色調の碗の底部で、「ハ」の字に開く貼り付け高台である。

130は銅の口縁～体部上部片である。口縁部の屈曲は弱い。体部外面に横方向のタタキの痕跡がみられる。131の口縁は丸みを帯びて屈曲し、内側に折れ曲がり玉縁状になる。132～134は羽釜で短く直立する口縁部である。銅は太く短い。器壁の磨耗が顕著で、調整



第33圖 SX01出土遺物(1)
 土師器・黒色土器・瓦器



第34図 SX01出土遺物(2) 須恵器

痕は不明である。135～137は甕で口縁部は「く」の字形に屈曲する。135の外面には4本/cmの粗い縦方向の刷毛調整、136は外面に4～5本/cmの縦方向の刷毛とユビオサエ痕が残る。137の体部外面には叩きとユビオサエの痕跡が残る。出土した破片も含め長胴形の甕が多いが、136のような丸胴形と考えられる破片もわずかに出土している。

黒色土器
瓦器

68～74は黒色土器、75は瓦器である。

69は口径10.0cm、器高3.6cm、半円形の背の低い高台が付く。器壁は厚く、ぼってりとした印象を与える。内外面ともに黒色を呈する。68は丸みを帯びた断面三角形の高台で、同様の機種の底部と考えられる。70は口径11.2cm、器高4.1cm、「ハ」の字に開き、断面三角形の低い高台が付く。縦方向のミガキの後、横方向のミガキを施す。器壁は非常に薄い。71は内面のみ黒色を呈する。72は口径15.7cm、器高4.6cm、体部内面の下から3分の1に縦方向のミガキ、その上に横方向のミガキがわずかにみえる。73は口径16.0cm、器高5.4cm、器壁は非常に薄く、やや内湾しながら延びる。内外面ともに黒色を呈する。磨耗がひどいが、ミガキの痕跡は認められない。74は口径15.6cm、器高4.6cm、内外面とも細かい丁寧なミガキを施し黒色を呈する。底部外面中央と高台の貼り付け部を除くその他の部分にミガキ痕跡がみえる。口縁端部は強いヨコナデにより内側に段ができ、沈線状に廻る。

75は瓦器碗で底径6.6cm、残存高3.9cm、見込みにミガキはなく体部の内外面に細かい長楕円状のミガキが施される。

須恵器

76～108は供膳具、123～129は調理具及び貯蔵器である。

76～82は小皿、83～86は坏、87～108は碗、123～127は鉢、128・129は甕である。

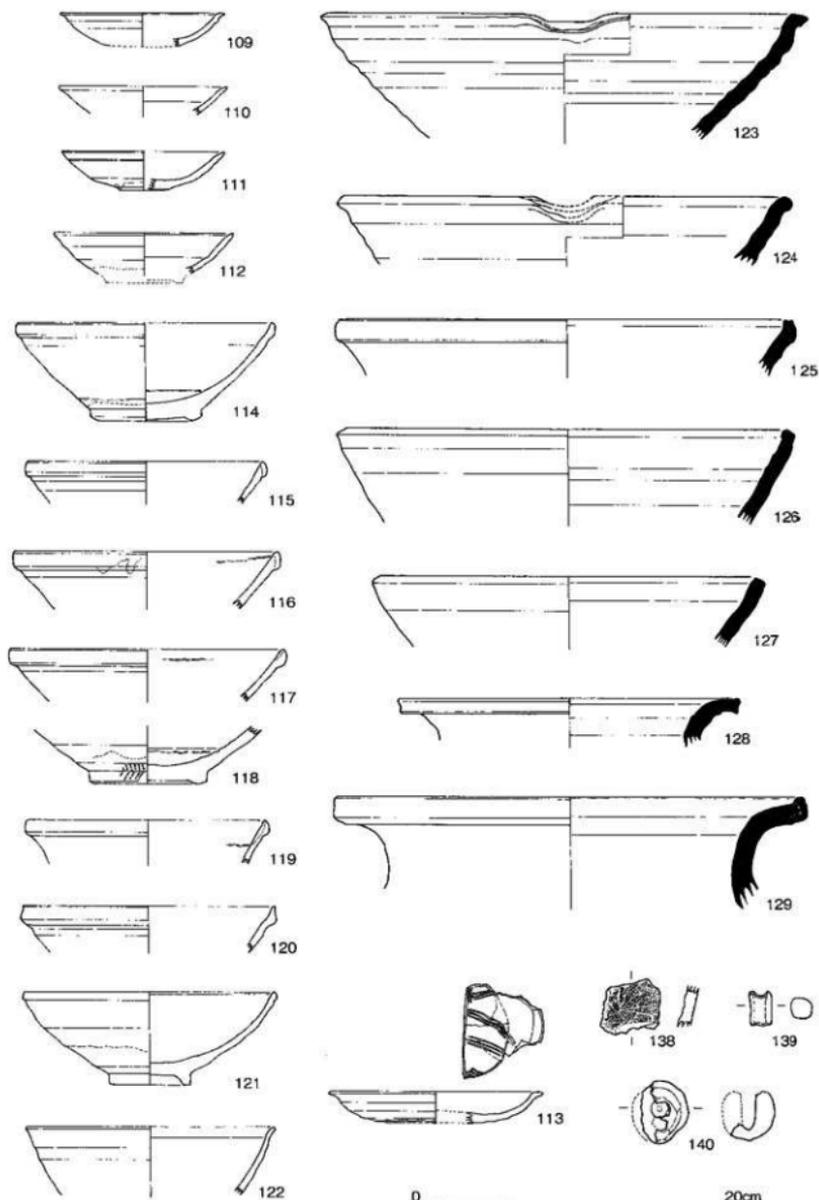
小皿は口径8.2cm～9.0cm、器高2.1～2.6cm、底部外面は回転糸切り未調整、口縁部回転ナデ、その他の部分は回転ナデに不定方向のナデが施される。

76は外反しながら延びる体部で口縁端を丸く収める。78は口径8.4cm、器高2.2cm、厚みのある底部から斜め上方に延びる体部は薄い。口縁端部は鋭角である。77・79の口縁端部はわずかに玉縁状になる。80は薄く平らな底部から鋭角に立ち上がる体部で、口縁端部内側に沈線状の段が廻る。81・82はやや内湾しながら延びる体部で、口縁端部はやや肥厚化する。

83～86は小型の杯で、口径8.6～10.4cm、器高3.3～3.7cm、底部の調整は85のみがへら切り未調整、その他は回転糸切り未調整である。いずれも焼成は良好である。

83は直線的に延びる口縁端部を丸く収める。全周はしなないが口縁部内側に沈線状の凹みがある。84・85は内湾しながら立ち上がる体部で、口縁端部は肥厚化する。

87～107は碗である。87は体部下半のみで外側に強く踏ん張る低い高台を貼り付ける。体部に1条の沈線が廻る。88は口径14.7cm、器高5.2cm、内面見込みの凹みが明瞭に残る。器壁も均一でシャープな作りである。89は口径14.6cm、器高6.6cm、底部径は小さく、内面の凹みは明瞭である。口縁下に沈線が廻るが、石の粒が動いた可能性の方が高い。91は口径16.0cm、器高4.8cm、口径に比して器高が低く扁平感がある。口縁端部は余剰粘土を折り曲げてナデ上げたため突帯状に内側に張り出す。92の口縁内側も粘土紐の折り返しにより膨らむ。93・94は体部中央が強いヨコナデによりわずかに括れる。97は口径15.8cm、器高5.3cm、口縁部に強いヨコナデを施し、端部は鋭角に収める。98は器壁が厚く、ややぼ



第35図 SX01出土遺物(3)

白磁・青磁・須恵器・その他

てりとした感がある。粘土紐の難ぎ目のナデ調整も甘いようである。100も体部外面に同様の粘土紐の痕跡がみえる。100～105は底部から斜め外側にやや鋭角に立ち上がった後、やや内湾しながら立ち上がる体部が薄手のものである。口縁端部はやや肥厚し、丸く収める。106は直線的に開く体部で、口縁端部まで全体に厚みがある。107は丸みをもった碗で口縁端部は上に面を作る。108は底径4.6cmの碗の底部で外面は回転糸切り未調整である。底部外側に土器の乾燥時に下に置かれた藁の痕跡がみえる。

123は口径30.0cm、残存高7.7cmの片口の鉢である。口縁端部は外側張り出し、上面を平たくする。作りは丁寧である。124の口縁は丸みを帯びる。125は口縁端をわずかに肥厚化させて上方に延ばす。上面には沈線状の門みが巡る。126の口縁端部は内側に張り出す。

128・129は甕で、大きく外反した口縁の端部は上方に軽く摘まみ上げる。

109～121は白磁、122は青磁である。

109～113は口径10.0cm～13.2cmの小皿で、109・113は口縁端部が折れ曲がり、上方外側に面をもつ。112は口径11.0cm、体部中央で逆「く」の字に内側に折れ曲がる。113は口径13.2cm、器高2.0cm、見込み部分に3条1組の曲線文様を髹描きする。釉調は112が青味の強い白色、113は黄味がかかった白色、その他は光沢のある乳白色である。

114～121は碗で、114は口径15.8cm、器高6.1cmである。内面見込みのすぐ上に圓線が1条、外面にも底からの立ち上がりすぐの位置に1条の沈線が巡る。外面の施軸はこの沈線まで底部は露胎である。119の玉縁状の口縁はやや小振りで、120の口縁は断面が三角形の玉縁で、上方を細く摘み上げ、内側に段をつくる。121はわずかに丸みを帯びた小さな玉縁状の口縁が付き、体部はわずかに内湾する。露胎部の色調は淡褐色、釉は焼成時の影響か、あるいは二次的に火を受けたのか気泡が目立ち、乳褐色に変色している。

また図化し得ていないが白磁水注の把手が出土している【写真図版21-1】。

122は青磁の碗で口縁端部を外側に曲げる。口径15.0cm、残存高4.1cmである。青磁はこの破片の他に1点も出土していない。

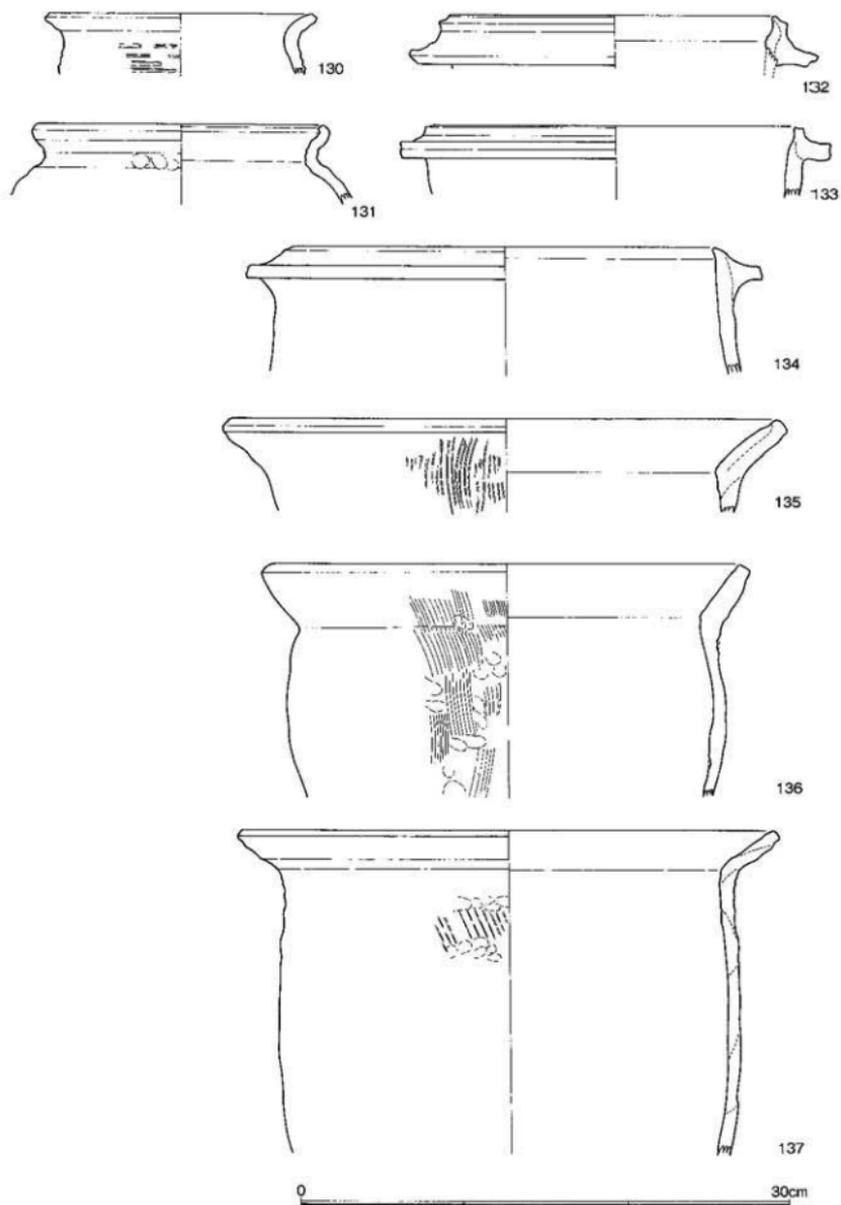
その他の遺物

138は須臾器で小型の壺、あるいは瓶かと考えられる小片で、草花を描いたような線刻がある。139は棒状有孔土鉢の破片で残存長2.2cm、孔の径は約0.8cmである。140は直径約3.2cmの球状の上製品で0.8cmの孔が穿たれる。孔は貫通していない。用途は不明。

この他、SX01からわずかに2点ではあるが緑釉陶器片が出土している。かろうじて1点碗皿類の高台部分と判別できるが、小片で摩滅がひどく詳細は不明である。

またSX01埋土中や調査区の北東部に堆積する遺物包含層からサ混じりの土塊が多く出土した。一部には熱を受けて表面が硬化、灰色に変色している部分があり、炉壁の一部と考えられる。SX01の北辺近く、SB05、SK403周辺での出土が目立ち、周囲に分布する炭との関連が注目される。なおSX01からは鉄・鋼製品の他、鍍滓の出土も目立つ。

さらに当該期の遺物ではないが、サスカイト製打製石鉄6点【写真図版23-3】を含むサスカイト片の出土も目立つ。遺物包含層や他の遺構埋土からも若干の出土はみられたが、ほとんどがSX01内からの出土である。SX01の底地あるいは下層に部分的に堆積する砂層に含まれるものが多く、早い段階で堆積した層に流れ込んだものと判断される。この他、砥石状の粘板岩、片岩、軽石などが出土している。



第36図 SX01出土遺物(4) 土師器

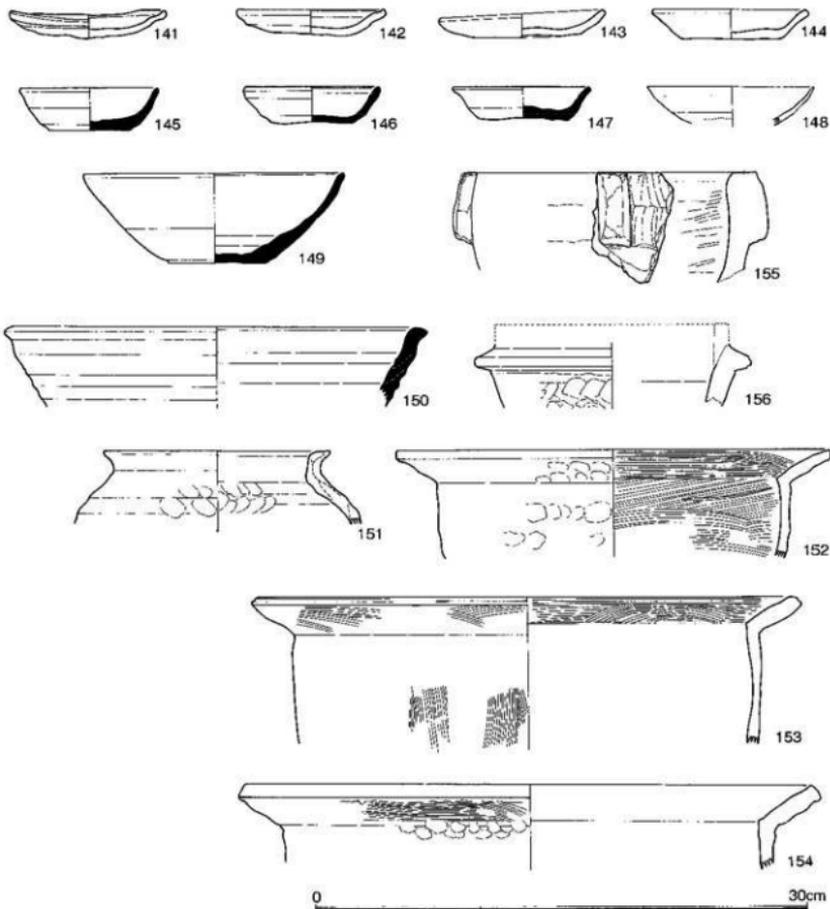
(7) 遺構に伴わない遺物

以下は地山面直上の土壌化層及び遺物包含層出土の遺物である。

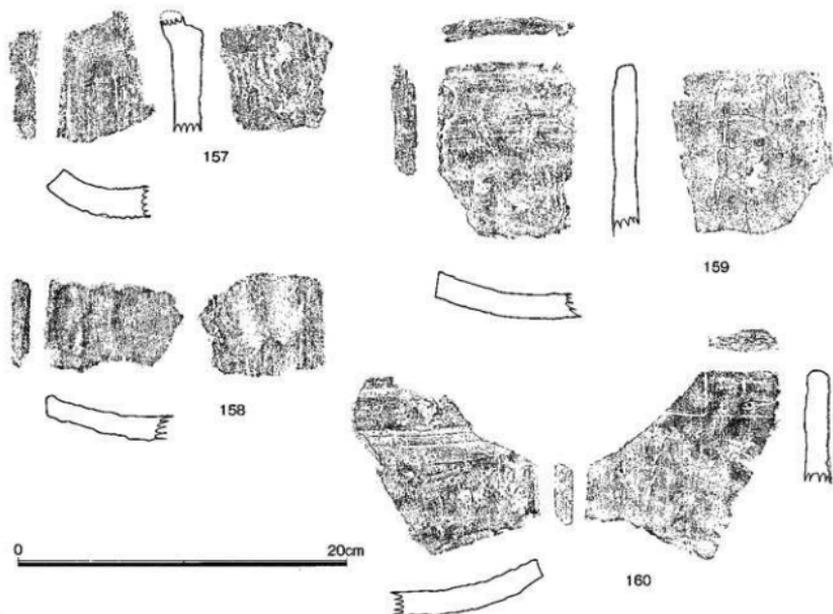
145～147は須恵器の杯で口径8.2～8.5cm、器高2.0～2.6cm、底部外面は回転糸切り未調整、145・146の体部はやや内湾する。146の口縁端部には折り返した粘土の段が巡る。147は体部上半を外反させる。

148は口径10.2cm、残存高2.3cmの白磁小皿で口縁から3分の2くらいまで施釉。

149は須恵器椀で、口径16.0cm、器高3.6cm、稜は明瞭でなく、体部は直線的に延びる。焼成は甘く、器壁も脆い。150は須恵器の控鉢で口縁端部を外側へ張り出す。



第37図 遺構に伴わない遺物(1)



第38図 遺構に伴わない遺物(2)

151は土師器の甕で「く」の字に強く屈曲させる口縁で、端部は水平に尖り気味に収める。頸部下は体部内外面ともにユビオサエの痕が顕著である。152～154は土師器の甕で、体部外面は口縁直下にユビオサエ、その他は8～9本/cmの縦方向の刷毛調整である。口縁部は基本的に内外面とも水平方向の刷毛調整ののち、細かい単位で不定方向の刷毛調整を加える。

155・156は滑石製石鍋の破片で、155は復元口径19.4cm、残存長6.9cmである。幅2.0cm、長さ3.0cmの縦長の楕状把手をもつ。木戸分類⁽¹⁾のⅡ-a-2類に属し、県下でも出土例が少ない⁽²⁾。把手は通常2個ないし4個であるが、いずれのタイプかは不明である。156は口縁部と体部下半を欠損する。全体の形状は明らかでないが、甕の形状よりⅢ-a-2類に属するタイプかと思われる。

157は丸瓦の狄端面で凹面は7本/5mmの布目、凸面は3条/cmの叩きが施される。側面はヘラ削り、玉縁はヘラ削りの後ナデ調整である。158～160は平瓦で、158の凹面は7本/5mmの布目、凸面は縦方向のナデ調整である。159・160の凹面は縦方向のナデ調整の後、狭端面に強いヨコナデを施す。凸面は縦方向のナデ調整で、側面と狄端面はヘラ削り調整である。

註1 木)『壱考「石鍋」』概説 中世の土器・陶磁器、中世土器研究会編 貞蔭社 1995

註2 甲斐昭光「兵庫県出土の中世滑石製品」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 2001

6. 金属製品

金属製品はほとんどが5区から出土しており、SX01を中心に総数127点を数える。内訳は鉄製品123点、銅製品4点である。鉄製品の内容は鉄釘が多く、漏り止めや錠（かすがい）のような部品類、また刀子や鑿、火打金などの道具類が挙げられる。一方、銅製品は、用途が明らかでない板状品などである。

鉄製品

鉄釘は全部で66点出土しており、いくつかの類型に分類することができる。

頭巻き釘：頭部を打ち延ばしたもの。打ち込みの際、頭部が屈曲する。(164・167・170・176・182・189・197・203・218・223・224)

折り釘：頭部を打ち延ばさず、身部に近い厚さの頭部が屈曲したもの。(217)

切り釘：頭部端が直線的に終わるもの。(161・165)

出土した鉄釘のうち、代表的なものについてのみ第39図に示した。全体の法量など詳細については、第2表に掲載している。また錠、釘に類似する遺物2点については同図に掲載した。

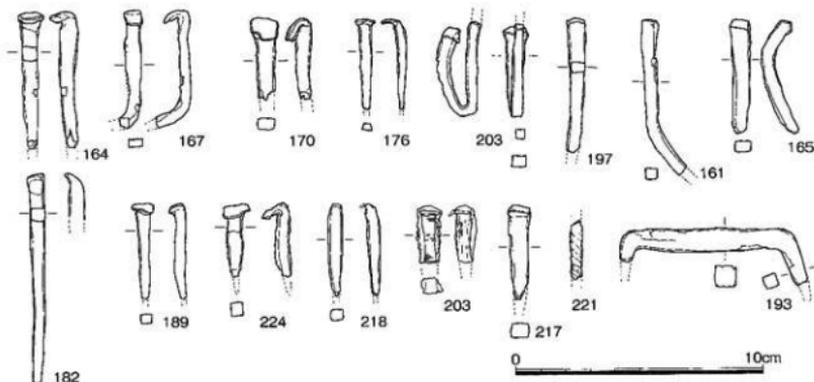
221はSX01より出土した円形断面の鉄棒を右回転に捻ったものであり、一見するとネジ釘のように見える。三田市中尾城には同様の捻りを加えた火箸の出土例があり³⁾、本例もこの可能性がある。残存長は2.4cmであり、上下端は欠損する。重量は1.1gを測る。

193は包含層出土の錠である。両端を欠損しており、残存長は7.6cm、残存重量は19.1gである。身部は、一辺9.2mmのほぼ正方形を呈する。

227はSX01より出土したもので、一辺1.1cmのほぼ正方形を呈する棒状品の一端を曲げて、幅2.4cmのループを作り出している。曲げられた端は身部に接していることがX線透過画像で観察できる。残存長11.4cm、残存重量は23.6gを測る。

228は金具の環状部だけの破片である。断面径9.2mmの円形の鉄棒を直径3.0cmの環状に曲げている。残存重量12.1gを測る。

229はSX01から出土した定形の刀子で、全長15.1cm、重量35.3gを測る。刃部長は12.6cmで、身幅2.1cm、厚さ6.4mmを測る。茎は長さ2.1～2.5cm、厚さ5.8mmであるが、背側と腹側ではやや開の位置がずれる。目釘孔は無い。



第39図 鉄釘

番号	R番号	調査区	出土層位	釘分類	長さ×横幅×身幅 (mm)	重量 (g)	番号	R番号	調査区	出土層位	釘分類	長さ×横幅×身幅 (mm)	重量 (g)
161	032-2	5区	SX01	切り釘	64.0×7.2×5.0	3.7	194	010	5区	SX01	折り釘	62.8×9.9×7.7	9.0
162	032-3	5区	SX01	—	70.3×—×5.3	2.6	195	141-1	5区	SX01	鍍金釘	54.0×11.0×11.2	4.8
163	125-1	5区	SX01	—	72.1×—×4.4	2.5	196	033-1	5区	SX01	—	46.0×—×4.0	1.7
164	034	5区	SX01	鍍金釘	55.0×9.7×6.3	4.5	197	032-6	5区	SX01	鍍金釘	54.7×7.4×5.8	3.9
165	145-2	5区	SX01	切り釘	46.0×7.7×6.5	4.9	198	029-3	5区	SX01	鍍金釘	37.0×6.6×6.8	2.9
166	137-1	5区	SX01	折り釘	47.0×10.1×9.0	5.1	199	034-2	5区	SX01	鍍金釘	40.0×10.0×6.4	2.6
167	039-1	5区	SX01	鍍金釘	48.0×6.9×5.4	2.7	200	034-1	5区	SX01	鍍金釘	43.3×10.9×7.7	3.8
168	033-1	5区	SX01	—	40.1×6.2×6.9	2.1	201	031-14	5区	SX01	折り釘	33.0×5.6×5.2	1.4
169	077	5区	SX01	—	36.7×7.5×7.3	3.7	202	032-8	5区	SX01	折り釘	36.0×7.2×5.2	1.8
170	141-1	5区	SX01	—	33.0×11.0×6.5	3.3	203	032-4	5区	南西面SX01周上	鍍金釘	36.0×9.5×6.3	4.6
171	125-4	5区	SX01	筵	11.4×11.6×3.5	0.7	204	029-4	5区	SX01	—	40.0×—×5.7	1.7
172	054-1	5区	SX01	—	21.6×7.9×7.1	2.5	205	032-5	5区	SX01	—	37.9×—×4.7	2.4
173	124	5区	SX01	—	22.0×8.1×7.6	1.8	206	141-2	5区	SX01	—	43.0×—×5.6	1.8
174	141-3	5区	SX01	切り釘	32.6×5.6×5.3	1.8	207	032-7	5区	SX01	—	34.0×—×6.6	1.6
175	126-2	5区	SX01	—	34.8×—×6.7	1.6	208	034-7	5区	SX01	—	29.1×—×5.3	1.2
176	037	5区	SX01	鍍金釘	36.0×7.5×4.0	0.9	209	031-3	5区	SX01	折り釘	22.7×6.6×5.9	0.7
177	141-2	5区	SX01	—	35.3×4.4×3.6	0.8	210	141-3	5区	SX01	—	22.3×—×7.0	0.9
178	137-2	5区	SX01	折り釘	28.3×5.6×3.7	0.4	211	141-4	5区	SX01	—	20.2×—×5.9	0.8
179	125-2	5区	SX01	—	28.7×7.4×4.9	1.4	212	031-4	5区	SX01	—	18.3×—×4.7	0.4
180	148	5区	SX01	—	28.9×—×7.5	2.7	213	141-7	3区	褐色色砂質土上面	鍍金釘	62.3×11.2×7.5	5.2
181	010-2	5区	褐色色砂質シルト	鍍金釘	85.0×6.5×5.3	5.0	214	035-2	5区	褐色粘質土	鍍金釘	50.1×9.8×7.2	4.1
182	035-2	5区	SX01	鍍金釘	29.9×—×5.5	1.0	215	139	5区	SX01豊島部粘土灰	鍍金釘	47.0×6.2×4.2	1.8
183	015-1	5区	褐色色砂質シルト	鍍金釘	80.3×10.6×7.5	7.4	216	031-1	5区	SX01	鍍金釘	38.9×7.1×5.7	2.5
184	008-3	5区	灰褐色砂	鍍金釘	62.2×9.5×6.2	5.8	217	032-2	5区	SX01	折り釘	36.7×8.4×6.9	4.3
185	025	5区	灰色シルト細面砂	鍍金釘	58.6×6.7×5.5	2.5	218	029-1	5区	褐色粘質土+褐色シルト	鍍金釘	37.0×—×5.6	2.1
186	053-3	5区	黄褐色細中	鍍金釘	73.2×9.6×5.7	5.3	219	034-4	5区	SX01	鍍金釘	29.0×9.7×5.6	1.9
187	024-1	5区	暗褐色シルト	—	34.1×—×8.2	6.1	220	034-6	5区	SX01	—	32.0×—×5.0	1.2
188	053-4	5区	黄褐色細中	—	42.7×—×9.0	5.4	222	032-3	5区	SX01	折り釘	21.0×7.7×6.9	1.9
189	023	5区	灰～褐色シルト	鍍金釘	39.0×9.3×4.4	1.6	223	026	5区	灰黄色砂質土	鍍金釘	23.2×9.8×6.8	3.4
190	015-2	5区	褐色色砂質シルト	—	43.3×—×6.4	3.1	224	031-8	5区	SX01	鍍金釘	29.5×10.4×4.9	2.0
191	017	5区	褐色色シルト	鍍金釘	35.5×7.7×5.9	1.7	225	029-2	5区	褐色粘質土+褐色シルト	—	29.0×—×5.4	1.1
192	008-4	5区	灰褐色砂	鍍金釘	29.3×6.0×5.1	2.5	226	019	2区	粘土・黄色盛土	—	30.0×—×4.5	0.7

第2表 鉄釘一覧表

左枠：第4次調査 右枠：第6次調査

230は刀子刃部片である。残存長8.8cm、身幅1.9cm、厚さ6.1cm、残存重量は30.4gを測る。

231はSX01より出土した不定形の鉄板片である。長さは7.6cm、重量16.9gを測る。横断面は細長い楔状を呈する。厚さは1.7～5.2mmである。図では厚い辺を下にしているが、刀子などの可能性もあり、天地逆の可能性もある。

232はSX01の上面から出土した鉄鏝である。刃部は縦長の菱形で、断面正方形の茎が付く。全長は7.3cm、刃部長2.9cm、同幅1.2cmで、茎長は4.4cm、断面は一辺4.2mmを測る。重量は3.0gである。茎の端部より2.3cmまでの部分には、矢柄の残欠と考えられる付着物が観察できるが、残りが悪く、詳細は不明である。

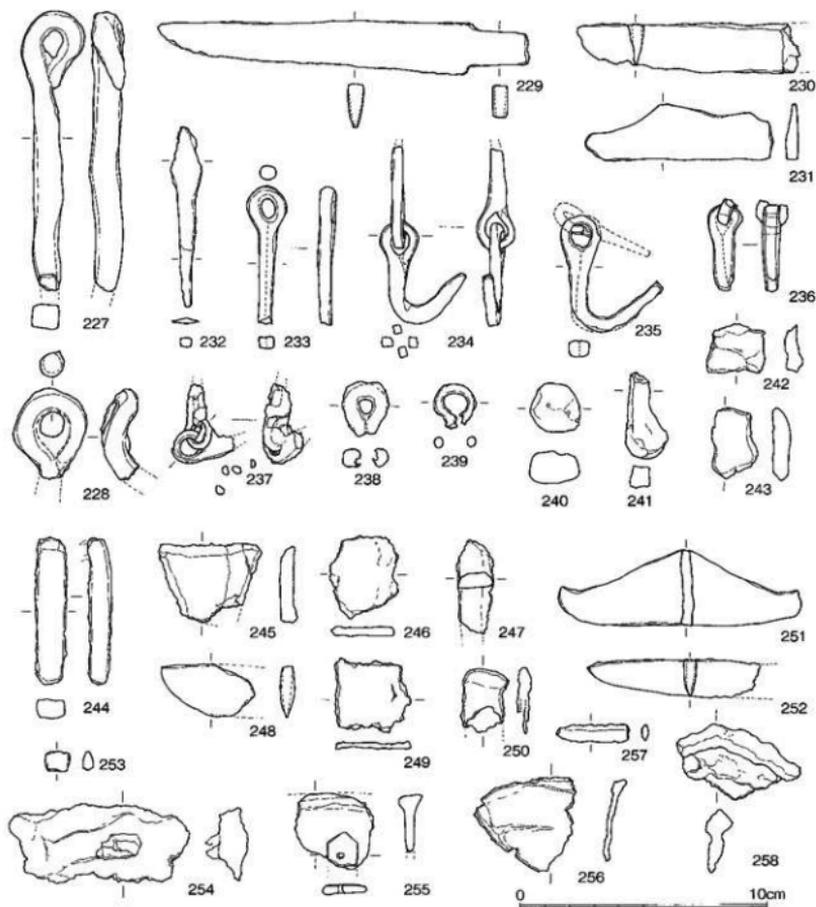
233～237は扇形止めである。一端を環状に作りだした鉤状金具と釘状金具を2個合わせているものが標準形で、建具等に打ち込んで使用するものである。233は包含層から出土しており、釘状金具のみが残存したと考えられる。残存長5.6cm、環の径8.2mm、身幅6.5mmを測る。1本の鉄棒を折り曲げて製作しており、X線透過画像でこの様子が観察できる。SX01から出土した234はほぼ完形品であり、長さ4.1cmの鉤状金具と残存長1.2cmの釘状金具からなる。環は打ち延ばされた身部を曲げて整形している。残存重量は8.6gである。235もSX01から出土したもので、鉤状金具はほぼ残存するが、釘状金具は鉤状金具の環内に破片が残るのみである。長さ4.7cm、環の径1.6cm、残存重量10.2gを測る。236は暗灰褐色砂質シルトよりの出土である。先端を欠損する釘状金具と、環内にもう一方の部品の環部破片が付着残存する。残存長は3.5cm、残存重量は6.3gを測る。237はSX01よりの出土であり、2個の部品（長さ2.5mm・同じく2.8mm）

が組み合わさった環部分のみが接合状態で残存していた。残存重量は38gを測る。

238はSX01より出土した。断面円形の鉄棒（径7.1mm）を環状に曲げた製品の環のみの破片である。環の直径は1.8cm、残存重量3.5gを測る。

239は他と同様、環状の残欠である。直径1.0mmの断面円形の鉄棒を曲げて作られている。環の直径は1.7cm、残存重量3.3gを測る。

240はSX01から出土した、ややつぶれた球状の鉄塊で、直径2.0cm、厚さ1.4cm、重量7.0gを測る。後述する鉾澤などと同じく、鉄製品生産に関連する材料鉄などの可能性もある。



第40図 鉄釘以外の金属製品

241はSX01より出土している。断面四角形の鉄棒を曲げて作られており、劣化のため本来の形状は不詳だが、227・228様の金具であったと考えられる。残存長3.5cm、重量8.6gを測る。

242（灰褐色砂より出土）、243（SX01上面出土）は用途不明の鉄片である。何らかの器物の破片と考えられるが、詳細は判じがたい。

244は灰褐色砂質土より出土した残存長5.9cm、残存重量19.9gの棒状鉄製品で、断面が12.3mm×9.2mmの長方形を呈する。先端を欠損するが、端部付近はやや面取りされたように湾曲しており、頭巻釘の可能性もあるが、詳細については定かではない。

245はPit18より出土した。本来は三角形を呈する鉄板と考えられる用途不明品である。一端を欠くため正確な形状は推測の域を出ない。また各辺は意図的に面取りされたようにみえる。上辺の長さ4.1cm、厚み7.3mm、残存重量22.1gを測る。

246～250はいずれもSX01より出土した板状の鉄製品であるが、いずれも破片であることから不明な部分が多い。248のみは、鉄刀の切先の可能性もある。形状は先端から背面は直線的に延び、反対に腹側は弧状に湾曲している。厚みは5.7mm、身幅は2.1cmを測る。

251は5区遺構面直上層より出土した山形を呈する火打金である。打撃部幅9.7cm、高さ3.1cm、厚さ4.7mm、重量39.1gを測る。平面形は平坦な二等辺三角形で、両底角が上方に反り上がって先端は尖る。打撃部はほぼ直線で、使用による抉れは観察できない。また通常、掘り部中央付近に紐を通すための孔が穿たれるが、本製品にはそれが無く、未製品の可能性もある。これは鉄製品生産関連遺物の出土も加味して検討する必要がある。

252は暗褐色粘質土より出土した、刀子身部破片である。残存長6.9cm、身幅1.5cm、厚さ3.5mm、残存重量8.3gを測る。

253・254は、SX01より出土した花崗岩の転石に錆着していた鉄片である。253は残存長1.6cm、幅1.1cm、厚さ6.4mmを測る平面形が長方形を呈する鉄製品で、劣化が著しいため本来の形状は定かでないが、縁部には人為的に整形されたと思しき平ら面を持ち、何らかの製品であることを示唆している。

254も石材に錆着していた。残存長9.0mm、幅4.4mmの平面方形を呈する鉄製品で、縦断面は楔形をしており盤状工具の刃部先端と考えられる。付着状況は基部側の破断面を石に接しているために使用状態であるかは不明だが、石作業に使用された可能性がある。



挿図写真6 石材に付着した鉄鑿

銅製品

255～258は銅製品である。255はPit19より出土した、一辺3.0cm、厚さ約5.6mm、残存重量15.1gを測る不定方形の板状製品である。三辺は破断しているが、一辺については端部を肥厚させており、容器の口縁部にも見える。また器壁には幅1.3cm、厚さ0.1mm程度の薄い銅板が嵌

留めされている。薄板の形状は端部を剣先状に尖らせたもので、装飾的要素を含んだものの可能性がある。鋳は軸のみが、直径2.7mmの孔内に残存していた。また、表面が泡立ったような形跡や、黒色の付着物が存在し、二次的な熱を受けた可能性がある。

256はSX01最奥部、転石間に溜まる砂層から出土した厚さ1.9mmの銅板である。一辺4.0cm程度の三角形を呈するが、破片のため本来の形状は不明である。残存重量は7.8gを測る。

257はPit20出土の銅破片である。残存幅2.9cm、厚さ3.1mm、重量2.1gを測る。全体的に内湾しており、断面はアーモンド形を呈している。

258はSX01肩部より出土している。重量感のある銅破片で、素材銅の可能性もあるが、意図的に肥厚させたと思われる縁取りや外縁端部に不自然な突出部を持つことなどから、器物の破片である可能性がある。法量は残存幅5.0cm、外縁部の厚さ1.0cm、残存重量20.6gを測る。

銅製品の

理化学的分析

銅製品4点の製作技法を検討するために、素材分析を実施した。実際の分析については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所保存修復科学研究所のご協力を得、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDAX EAGLEⅢ)を用いた分析をおこなった。今回は器表面の定性分析のみを実施している。第41図及び以下に結果を記す。

255の地金部分は銅を主体とし、鉛、ビスマス、砒素が検出された(第41図-1)。銅と鉛は化合物として存在しないため、人為的に混和された素材であることがわかる。微量のビスマスと砒素についても意図的に混入されたものの可能性が高い。一方、薄銅板(第41図-2)及び鋳(第41図-3)については、ほぼ銅のみのピークに加え、砒素の弱いピークが得られた。また、付着した黒色物からは、銅と鉄がほぼ同じ強度で検出された(第41図-4)。これはイオン化した鉄が沈着した可能性が考えられる。

256は銅が高く、また鉛のピークも同時に検出された(第41図-5)。先述のように、これら素材は人為的に混和されたものと考えられる。

257の測定は、腐食層の剥離した金属光沢を有する部分でおこなった(第41図-6)。結果、256と同じく、銅を主とし鉛が混入するものと考えられる。また砒素とビスマスの弱いピークが検出されたが、腐食層表面の方が鉛のピークが強く出ている。

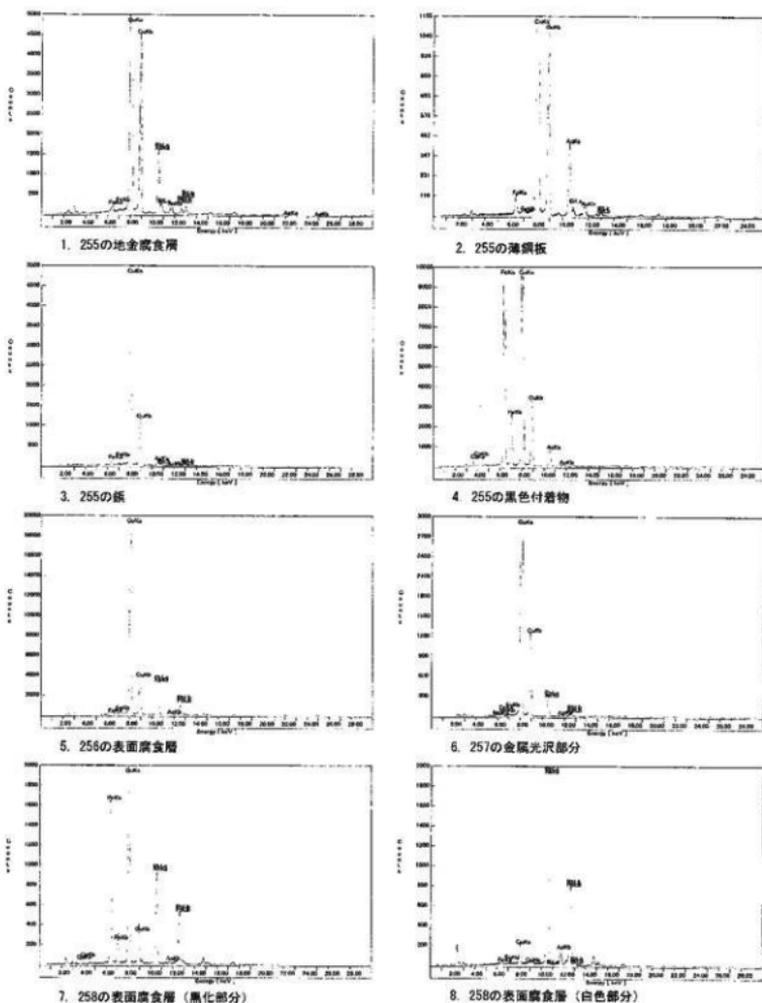
258は表面腐食層について、黒化した部位(第41図-7)と白い部位(第48図-8)について測定を実施した。結果、他の製品に比して銅に対する鉛の強度が非常に高く検出された。これは腐食によって母材の銅が溶出し、表面で腐食生成物として析出したものと考えられる。また、黒色部分においては鉄を強く検出しており、255と同様に沈着したものと推測される。

以上の分析結果によると、上記の銅製品はほぼ銅と鉛を混和した素材によって製作されていたことが示唆された。考古資料をはじめ、古代から中世にかけて製作された多くの銅製品に使用されている、鋳が検出されなかったことは興味深い。これらの製品の製作地は不明であるものの、狭小ながらひとつの傾向を得た意味は大きい。

鋳

第4・6次調査において、鋳滓が31点出土した。これらについて、肉眼観察・X線透過観察・デジタルマイクロスコプ(KEYENCE VHX-900)によるミクロ組織の観察を行った。

肉眼による観察では、大まかな形状から椀形滓・炉内の流動滓・ガラス質滓などの判別を行い、これらがほぼ椀形滓であると考えられた。椀形滓は溶解剤の底に残留する滓であり、主に鍛冶炉の操業に伴う遺物といわれている。



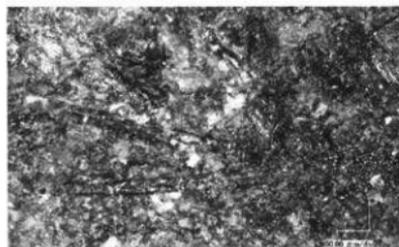
第41図 銅製品の蛍光X線分析結果

これらに観察されたマイクロ組織は、鋳鉄に見られる樹枝構造のレーデブライト組織であり、いずれの鉱滓にもほぼ普遍的に観察された。レーデブライト組織を構成するうち、針状結晶はファイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、粒状結晶はウスタイト (FeO) であると考えられる。これらのマイクロ組織は鉄精錬～鍛錬鍛冶作業に伴って生じる滓に顕著に見られることから、先程の所見及び別項に記した炉壁材の出上実と合わせ、当地において鍛冶が行われていた可能性が高いものと推定できる。

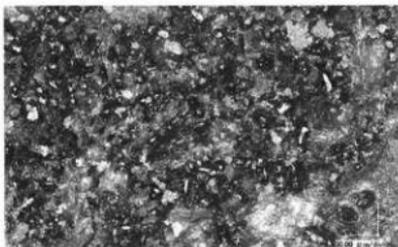
次数	R番号	番号	出土層位	遺物名	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	磁性性	ミクロ組織
4次	015-2	—	暗灰褐色砂混シルト	楕形薄	20.8×11.8×11.3	4.30	あり	ウスタイト
	122-1	270	SX01	楕形薄	36.8×28.5×21.4	22.11	あり	ウスタイト
	122-2	271	SX01	楕形薄	28.5×22.3×18.3	10.54	あり	ファイヤライト+ウスタイト
	123-1	274	SX01	楕形薄	46.0×37.8×20.3	35.22	なし	ウスタイト+ファイヤライト
	123-2	269	SX01	楕形薄	50.8×36.3×19.3	38.03	あり	ウスタイト
	123-3	259	SX01	炉内洋	51.1×41.7×15.2	35.03	あり	ウスタイト
	123-4	—	SX01	楕形薄	28.2×17.8×9.8	5.41	あり	ウスタイト+ファイヤライト
	125-5	266	SX01	楕形薄	22.0×21.1×11.7	7.55	あり	ファイヤライト+ウスタイト
	125-6	278	SX01	楕形薄	36.0×24.2×14.9	12.59	あり	ウスタイト+ファイヤライト
	126-3	—	SX01	楕形薄	30.3×25.4×20.0	19.21	あり	ウスタイト
	126-4	267	SX01	楕形薄	37.5×30.3×23.7	33.77	あり	ウスタイト
	126-5	277	SX01	楕形薄	35.8×34.8×19.4	21.41	あり	ウスタイト
6次	028-2	272	SX01南(石のない部分)	楕形薄	30.2×25.9×9.1	9.02	なし	ウスタイト
	028-6	—	SX01南(石のない部分)	鉾薄	径14.3	4.17	あり	—
	028-7	268	SX01南(石のない部分)	楕形薄	39.4×32.1×29.3	45.87	なし	ウスタイト
	031-8	275	SX01	楕形薄	37.1×28.3×12.1	10.99	あり	ウスタイト
	031-9	276	SX01	楕形薄	25.8×19.6×22.1	15.28	なし	ウスタイト+ファイヤライト
	031-10	262	SX01	炉内洋	43.6×23.3×14.5	11.41	なし	ガラス質薄
	031-11	261	SX01	楕形薄	30.4×29.3×17.5	14.63	なし	角ばった結晶
	031-12	265	SX01	楕形薄	25.7×23.4×15.7	8.45	あり	ファイヤライト+ウスタイト
	031-15	—	SX01	楕形薄	27.0×16.3×8.7	4.12	あり	ファイヤライト
	032-11	—	SX01	楕形薄	19.8×15.8×10.9	6.78	なし	ウスタイト
	032-12	263	SX01	楕形薄	17.9×14.9×16.1	9.46	あり	ウスタイト
	034-9	273	SX01	楕形薄	58.0×56.1×40.2	97.65	あり	非晶質の珩化鉄+マグネタイト?
	034-10	260	SX01	炉内洋	29.3×15.3×18.9	7.17	なし	ガラス薄+ウスタイト+ファイヤライト
	034-12	—	SX01	鉾薄	18.4×16.3×11.9	2.04	なし	—
	034-13	—	SX01	鉾薄	17.1×14.8×10.2	2.09	あり	針状の結晶
	034-14	—	SX01	鉾薄	19.5×11.2×6.1	0.89	なし	微細な結晶
	034-16	—	SX01	炉内洋	22.9×15.9×12.0	3.42	なし	ガラス質薄
	046	—	SB02-SP203	炉内洋	33.3×17.1×12.6	6.50	あり	ウスタイト+ファイヤライト
141-5	264	SX01南東側最深部	楕形薄	23.6×23.4×13.6	10.93	なし	ウスタイト+ファイヤライト	

第3表 鉾薄一覽表

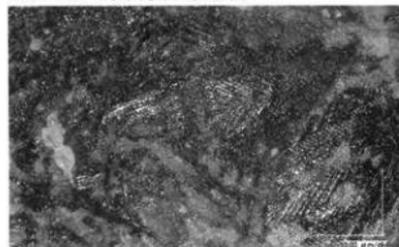
※なお、全点が破片であるため、重量は現状での計測値。



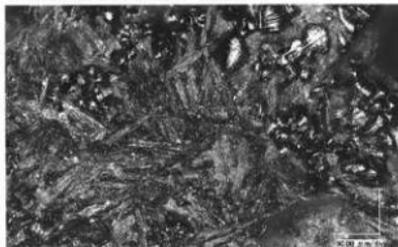
No. 271 SX01 ファイヤライト+ウスタイト



No. 268 SX01南(石のない部分) ウスタイト



No. 265 SX01 不明結晶+ファイヤライト



SB02-SP202 ファイヤライト+ウスタイト

挿入写真7 鉾薄のミクロ組織(デジタルマイクロスコープ画像)

Ⅲ. まとめ

1. 3次にわたる調査の成果について

木山浄水場内での3次にわたる調査の結果、扇状地扇頂付近、高位段丘上に立地する当調査地において平安時代中期から中世初頭の掘立柱建物、土坑、溝など集落の存在を示す遺構や遺物が確認された。当地における集落の様相や判明した事象について記していく。

(1) 遺跡の時期と集落形成

遺跡の時期

今回の調査では掘立柱建物6棟をはじめとする集落の一端を形成する遺構を検出した。出土遺物の大半は調査地南東隅に位置するSX01とした谷状地形から出土し、一部の建物や土坑などを除き、遺構からの出土遺物は概して少なかったが、それらの遺物と遺物包含層、流れ込みの状態と考えられるSX01出土遺物には時間的に大きな隔たりはなく、基本的にはいずれも集落が営まれた時期に属するものと理解できる。

出土土器には供膳形態のものが多く、ほとんどが土師器皿類である。次いで須恵器碗、小皿の占める割合が高く、逆に鍋、羽釜、甕の煮沸具、調理具、貯蔵具の類は大半が遺物包含層から出土し、全体に占める比率はわずかであった。出土土器は調査地が高位段丘上に立地すること、流れ込みの状況で出土したものが多くことから磨耗がひどく、細片化が顕著であった。そのため数量（個体数）や規格の把握が困難であったが、それ以前に前提となる土器の種類認識においても、黒色土器や軟質の須恵器は土師器との区別において不明瞭なものが多かった。土師器も磨耗がひどく、細片化が顕著であったが、出土遺物の中で大半を占めることは認識できた。

出土遺物の中心となる土師器皿のうち、時代認識において指標となるものに「て」字状口縁の皿が挙げられる。口径10cm前後の小皿が中心で、口縁端の玉縁の形状や体部の屈曲、器壁の厚みをみた場合に時期幅が認められる。器壁が薄く玉縁が明瞭なタイプは少なく、大半は体部の屈曲が弱く器壁の厚くなるタイプが多い。口径15cm前後の大きいタイプの「て」字状口縁の皿は今回確認されていない。これらは11世紀末～12世紀前半の様相と考えられる。

その他、口径10cm前後の小皿では、内湾する体部が厚めのもの、回転台を使用した薄く平らな底部の皿などが出土した。また少数ではあるが、口径15cm前後の皿には、体部上半が強いナデ調整によって丸みを帯びて内湾するものと外反しながら延びる二種類があり、いずれも口縁部は強いナデ調整により外反形態となる。12世紀前半を中心とする時期の遺物と考えられる。

須恵器碗の形態は、見込みに凹みが残る、平高台を残すものが依然として多いが、高台がほとんど消えて見込みの凹みが残るもの、また見込みの凹みもなくなるものが出土しており、土師器皿と同様、やや時期幅が認められる。

出土した土師器、須恵器の形態から見た集落の存続時期は11世紀後半～12世紀前半を中心とするものと考えられる。また量的には少ないが、口縁が肥厚する土師器皿の形態や、直線的、また扁平化の進んだ体部をもつ須恵器碗も混じることから、13世紀前半頃までは

何らかの形で生活圏が継続していたものと考えられる。

輸入陶磁器については、一連の調査で出土したものは白磁がほぼ全てといてもよく、青磁は1点のみが確認された。白磁碗はほぼⅣ類のもので占められるが、復元できた碗121は口縁の玉縁が小さく、内湾する体部は深く、高台が細く高いことからⅡ類に属するものと思われる¹⁰⁾。白磁に偏る出土傾向は12世紀代の範疇で捉えられるものであろう。

その他に出土量は少ないが、緑釉陶器片、貼り付け高台の須恵器碗、土師器碗の出土、内外面両面で緻密なミガキ仕上げとした黒色土器が含まれるなど、周辺では10世紀代より徐々に集落形成がはじまったものと考えられる。

集落形成

今回の調査地南約50mに位置する第1次調査地では、旧石器時代～現代に至るまでの幅広い時代の遺構・遺物が確認されている。その中で10～12世紀代に一つの西期が認められ、当調査地と一連の集落を形成する時期にあたるものと考えられる。

第1次調査地では横穴式石室を主体とする古墳時代後期の古墳11基が確認され、第2次調査地でも古墳時代中期の古墳の存在が示唆された。周辺では5世紀代から7世紀初頭まで造墓活動が行われ、さらに広い範囲での古墳群の形成が予測された。当然、当調査地周辺でも古墳や古墳時代の遺構の拡がりが見られたが、遺構は勿論、遺物の出土も全く確認されていない。古墳の構築は標高72～78m付近の第1次調査地付近で納まり、当調査地周辺は現状でも背後に急峻な山稜が迫ることから、古墳が展開する余地がなかったものと判断される。

古墳時代の次に第1次調査地で確認される生活痕跡は平安時代中期の掘立柱建物や耕作に伴う鋤溝である。当調査地で検出した建物や土坑などと時期的に符合し、本格的に段丘高位に居住域が伸張、新たな土地開発が行われた状況と捉えられる。

なお1区で検出したピットからは弥生土器の可能性のある小片の遺物が出土している。第1次調査では弥生時代後期、縄文時代早期の竪穴住居址が検出され、当調査地5区のSX01からはまとまった量のサヌカイト片が出土、大型の剥片や石鏃を含む。縄文の特徴、弥生的特徴を備えるもの双方が出土しており、当該期の顕著な遺構の拡がりには確認されていないが、背後の山林へ分け入る際のポイントやベースキャンプなどであったことが考えられよう。

(2) 検出遺構の検討—建物と落ち込み—

掘立柱建物

今回の調査では3区から5区にかけての範囲で掘立柱建物6棟と横列4列を検出した。第1次調査地の北、標高約80m付近の高位段丘上に集落が広がる状況が確認された。調査地には多数のピットが存在し、この他にも建物などが存在した可能性は高いが、ひとまず現状で復元できるものを示した。

建物を構成する柱穴からの出土遺物に乏しく、また各遺構に切り合い関係がないなど、建物配置や変遷については不明な部分が多いが、簡単に建物配置について触れたいと思う。

今回復元した建物の桁行方位をみた場合、2棟ずつが比較的近い主軸をもっている。6棟の建物はSX01を囲むように大きくは西に位置するものと、南北にそれぞれ分かれて建つものが軸方向で近似する。遺構番号で記すと

- ① 【SB01】と【SB02】の組み合わせ－（軸方向）N7°W
- ② 【SB03】と【SB06】の組み合わせ－（軸方向）N8°E
- ③ 【SB04】と【SB05】の組み合わせ－（軸方向）N30°W

となり、これに楕円が対応する。

建物SB01・02は同じ方向軸をもち近接して構築される。同時期に存在した可能性が^ある。SB02と03は重複する位置にあり、同時期ではない。また建物と楕円の組み合わせでは、SB01とSA01は位置的に重複し、同時期でなく、方向性でみた場合、SB02とSA01・02・04が対応するようだが、すべてが同時期であったかは明らかでない。SB04～06は側柱建物を含み、いずれも小規模な建物である。SB05と06は重複する位置にある。南北で対応する建物のうち1棟は側柱建物で、SB04・06は梁間が1間である。

今回の調査範囲では、大きくはSX01（谷状地形）の奥、西側にやや大型の建物SB01～03を配し、他の小規模な建物はSX01の縁辺部に構築されていたことは理解される。SB01～03の3棟の建物は復元した建物の中では規模が大きく、調査地南西、現管理棟方向に拡がり、第1次調査地へ続く比較的広い平坦面に位置する主要な建物であった可能性が高いもので、これを軸にSB04～06の側柱建物を含む小規模な建物、楕円が付随すると思われる。土師器皿と須恵器碗が出土したSB05は12世紀前半の建物と考えられるが、その他の建物や楕円の時期については明らかでない。

SX01

第4次調査Ⅱ区において一部を検出し、石が積み重なった状況と内部から多量の石、礫、土器（主に土師器皿）が出土し、その様相から苑池状遺構の一部になるものと考えられた。また苑池であった場合の規模を確認する目的でトレンチ調査を実施、トレンチ内で大型の石を配する箇所や小礫の分布する浅い窪み状の部分を検出した。結果、東西15m以上、南北10m以上の規模を有し、小礫の広がる部分が州浜になるものかと想定された。この範囲はその後実施した第6次調査4区（今回報告の5区）南半の範囲に相当し、第6次調査では未掘部分の調査を行い、苑池状遺構の内容把握に調査の主眼をおいた。

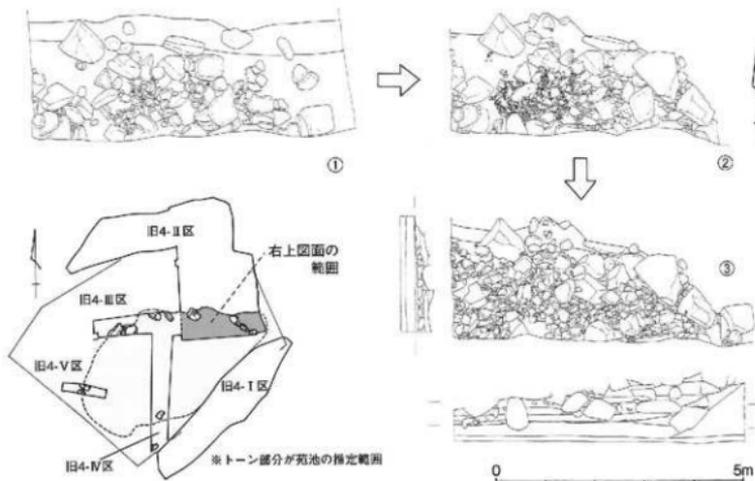
まず結論から述べると、SX01は積極的に苑池と断定できるものではなかった。基本的には谷状地形を伝った上石流の痕跡で、遺物の出土状況から集落が形成されていた時期にも谷状に開口していたと考えられる。石積み状の痕跡は土石流とそれを覆う粘質土層の堆積境に露頭した転石が積み重なったもので、その上に転石や遺物を含む土砂が堆積する状況にあった。埴土は砂混じりのシルト層を基調とし、水成堆積といえるが、谷状地形に堆積したものとすれば水分を多く含む可能性は高い。池と仮定した場合の堤であるが、今回の調査では確認しておらず、周辺の地形を考えても存在した可能性は低いと思われる。

また、Ⅲ～Ⅴ区で確認していた大型の石は、地山に露頭する転石であり、浅い窪み状の地形は、南側へ緩やかに下がる傾斜地に堆積した土壌化層と遺物包含層の一部で、州浜と捉えられたものは拳大ほどの転石のあつまりであったことが判明した。

第42図は第4次調査Ⅱ区でのSX01内の堆積状況を図化したものである。当初、落ち込みの肩部は直線的であったが、肩部に大型の転石が次々と堆積することにより環状になり、徐々に石や遺物がその上に堆積していく過程がわかる。落ち込みの縁辺部には不自然に巡る石列や、石の抜き取り痕と考えられる窪みがあり、比較的土器が集中した。転石はそれ

自体が自然堆積であるのか、あるいは人工的に配されたものか実証することは難しく、第6次調査では苑池とした部分を大きく開削し、調査を実施することを得たが、判断に迷う箇所が多々あったことを記しておきたい。

また現在、浄水場から南東方向へは急な下り坂となっており、これは今回検出したSX01の延長線上にあたる。急坂となった現道が小浸谷の痕跡でないかと考えている。



- ①下層 大型の転石が多く、谷状地形の崩部は直線的。土石流貫流後、時間を経っていないのか？東側最深部から徐々に土砂により埋没。
 ②中層 東側、埋没した土砂の上に転石が重なりはじめる。大小の転石、土砂とともに遺物の混入が多くなる。
 ③上層 東に臨む転石の重なりが逆のように、中層よりさらに礫や遺物の流れ込みが多くなる。疑似苑池化。
 Ⅱ～Ⅴ区トレンチ間 南下がりの地形に土壌化層、遺物包含層が堆積。浅い窪み状で、やや小粒の石が多い。疑似州沢化。

第42図 第4次調査Ⅱ区SX01検出状況

2. 調査地における石に関する事象

(1) 転石の加工について

今回の調査地では土石流に伴う転石を多く含む層が遺構面を形成しており、遺構の構築に際し、影響を与えたと思われる箇所が存在した。調査により気付いた転石の取り扱いに関する事象について書き留めておきたい。

調査区5区の南半では転石が帯状に堆積し、ここに位置するSB01～04の4棟の建物を構成する柱穴には転石が接し、掘削の際に支障となる転石を削る例がみられた。【P.18～20 第18～20図・写真図版8・9】

遺構検出レベルでは多くの転石が露呈していたが、本来、建物などの遺構が構築された当時は調査区の土層断面でみ限り、地表面の土壌化により転石はほとんどみえない状況であったと考えられる。転石は一辺（または径）1.5～2.0mを越す巨大なものから、人頭大、拳大のものまで様々で、最も多いのは人頭大ほどのものである。調査地では遺構掘削の際に、わずかに例外的なものもあるが、通常は石があった場合でもそのまま石の一

部を削りながら遺構を掘り進めていたと考えられる。

5区中央に位置する土坑SK07の掘形は、径約1.5mの大型の転石に接する。遺構の掘削に際してはこの転石の側面を非常に丁寧に削って掘形を穿っている。この転石の頂部は粗く割られ、周囲が彫り窪められ、この窪みから近世の陶磁器片が出土した。近世の耕土層が堆積する段階でも依然、上面に露頭していたと考えられ、当初は掘り起こそうとしたが、石の規模が大きいため断念したものと推測される。近世段階と平安期の段階とは石の扱いが異なり、近世期には取り除こうとしたが大きさのために断念し、耕作の支障となる上部のみを大きく粗く割ったと考えられるのに対し、平安期には石そのままに、遺構の掘形が掛かる部分の表面のみを細かく鑿状の工具で削り、遺構の輪郭に沿っている。両期の石面の形状の違いは目的が異なることにより生じた差異である。

SK07の平安期の加工痕は、遺構検出面より上は約10cmが残るのみで、その上の状況は後世の耕作に伴う粗割り作業のために不明である。元の石の大きさはわからない。

反対に土坑の底に向けては、形状に沿わせて30cmほど掘り込んでおり、周囲の土の部分と同じ傾斜で細かく、丁寧に削られている。土坑底のレベルでも転石の底は確認できない。巨大な転石である。

この他にも5区北西部では転石の上部を削るものや石自体を抜き取ったと考えられる痕跡が確認されている。ほとんどは耕作の際に障害となる石の除去を図ったものと思われるが、石を割った後の屑を集積する土坑なども確認されており、採石作業が行われた可能性も高い。



挿図写真8 SK07掘形にかかる転石の削り面

(2) 第6次調査出土の矢穴石

5区での遺構掘削の際の転石の扱いについて触れたが、谷状地形SX01に流れ込んだ石の中に矢穴痕のあるもの（以下、「矢穴石」）を一石確認した。

SX01の最終埋土の上面は土壌化し、その上に遺物包含層が堆積、さらに上層は中世耕土層で覆われる。矢穴石は層位、レベル的にも中世耕土層より下位で検出した。

矢穴石の大きさは幅0.6m、割れ面の高さ0.7m、奥行き0.5mで、比較的硬質の花崗岩である。矢穴痕同士の間隔は3.0～6.0cm、矢穴痕の幅は4.0～6.0cmで、明確な矢穴痕が5穴確認できた。この場所で割ったものか、残石を投棄したものであるかは明らかでない。割れ面に残る最も明瞭な矢穴痕は上端幅約6.0cm、深さ約3.0cmである【第43図】。

第43図左の矢穴痕の底部は丸く、右も形状としては角部に丸みをもっている。矢穴の小口幅は狭く、深さは3.0cmで非常に浅い。矢穴穿孔面に打ち込みのときの剥離痕がわずかに認められるが、割れ面は直線的である。

六甲山南麓地域は近世初頭、大坂城の再構築に際し石垣材の切り出しが盛んに行われた場所である。南東麓の西官市から芦屋市にかけての山麓部では巨大な転石を切り出した丁場が確認されている。近年、芦屋市の山麓部では開発に伴い、石切り丁場の調査の事例が増え、精緻な調査の実施により、当時の採石の様相がかなり明確に復元されつつある。

その中で中世に遡る可能性のある矢穴の存在が指摘されており⁵²、今回出土した矢穴石の矢穴痕はその形状に近いものではないかと考える。参考とした類例に比べ、今回出土したものはやや小振りであるが、地域的特色と当該調査区におけるSX01の矢穴石の出土層位からみた場合、興味深い資料になるものと思われる。



①SX01 矢穴石出土状況

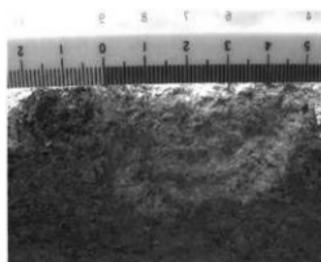


②矢穴痕と割れ面の状況

挿図写真9 第6次調査 SX01出土矢穴石



第43図 矢穴石矢穴痕拓影



挿図写真10 矢穴痕近接写真(割れ面)

また矢穴石の傍らで、幅1.0cm弱の瓢状の鉄製品が附着した石が確認されており、これも中世耕土層形成以前の堆積層に含まれる。この附着状況を確認するため石の表層を採取して持ち帰り、X線により透過したが、結果として鉄製品は石には喰い込んでいなかった。SX01からは多量の釘などの鉄製品が出土したことから、埋没過程でそれらが附着したものと考えられたが、SX01からの鉄製品の出土量からすると、この石にのみ金属器が附着している状況に疑問が残る。消極的ながら、この場で採石作業を行っていたことを想起させる状況として書き留めておきたい。

住吉川水系で今のところ大きな採石地は発見されていないが、良質の石材を産する場所であることは後の近世以降の産業史からも明らかであり、それを遡る石材加工の痕跡が、第1次調査地をはじめ、流域の遺跡で確認されている⁵³。

3. あとがき

今回の調査では平安時代中期～中世初頭の数多くの遺構・遺物を検出した。当時の地形はおそらく浄水場の背後にまで山稜が迫り、奥行きはさほどなかったものと思われる。西側は住吉川への傾斜地形となり、東側の山裾には谷状地形が見られる。この点から考えて今回の調査地から集落が大きく展開する余地はないものと考えられる。この段丘面での居作域の中心はおそらく、現在の浄水場内の管理棟付近にあったと想像される。

標高80mの高位段丘上、この場所にどのような集落が存在し、当時の集落景観とはいかなるものであったのか。遺構の内容からは特に抜き出た要素は認められないが、遺物に関しては通常の集落と比較するとやや優位性が感じられる。憶測を加えるが、施釉陶器の出土、輸入陶磁器の量、古段階の石鍋、用途不明ながらも銅製品または銅素材になるものが出土し、大量の土師器皿の消費が考えられるなど、一般的な集落とはやや様相を異にするものといえる。今回言及できなかったが、周辺における古代末～中世の遺跡の分布、立地状況を検討する必要性がある。

当初、菟池と考えられていた石組み遺構SX01は、谷状地形に堆積した転石が露頭したものだと判明した。眺望の効くこの地に菟池があり、土師器皿の大量消費という状況から富裕層の邸宅などがあった可能性が指摘されていたが、それらを肯定する遺構の内容には至らなかった。このSX01の谷状地形の最奥部から東側へ、当初は山裾に沿う場所であったのだろうが、この場所からは釘を主とし、盤、刀子、罫止めなどの鉄製品をはじめ、銅製品、炉壁と考えられるスサ入り土塊が集中して出土している。周囲には炭が薄く分布し、近接する建物の柱穴からは籬羽口片が出土している。また転石を削り加工した痕跡を示す土坑が隣接する事象は興味深い。集落内で生活に供する道具の製作を行う小鍛冶が行われた場所で、同時に採石作業に伴う工具の製作も行っていたものと推測する。

SX01内の石に矢欠痕が認められたこと、盤と考えられる鉄製品が石に付着していた状況。これらは出土層位などから、少なくとも中世の耕土層が形成される段階までに石を削る、取る、あるいは加工を行っていたことを示すものと考えられる。SX01の縁辺部に立地する側柱建物が丁房などの性格を担うものかもしれない。

第1次調査で明らかのように、西岡本遺跡は縄文時代早期から現代の異人館まで連続と続く遺跡であることは判明していたが、今までの調査では上に古墳時代の遺構・遺物に突出した要素があり、主たる時代としてクローズアップされていたが、このたびの一連の調査から古代～中世にかけても注目すべき内容をもつ遺跡であったことが改めて理解できた。集落内でも最高所に位置するものと思われるこの集落がどのようなものであったのか。さらなる周辺での調査の進展が期待される。

註3 岡崎正雄・山田清朝・山上雅弘「中尾城跡」兵庫県教育委員会 1989

註4 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-形式分類と編年を中心として-」九州歴史資料館研究論集 四 1978

註5 森岡秀人・坂田典彦「徳川大坂城東六甲採石場(岩ヶ平石切丁場跡) 芦屋市教育委員会 2005

註6 丸山潔「住吉町遺跡(第11次調査)」神戸市教育委員会 1990

口野博史「郡家遺跡(岸本地区)」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1988

写真図版



SX01 出土土器



1. 調査地遠景(南上空から:空撮)

矢印が調査地



2. 調査地遠景(南上空から:空撮)



1. 旧第4次調査Ⅱ区(南東から)=5区北東部



2. 旧第4次調査Ⅱ区SX01(北東から)=5区SX01

写真図版3



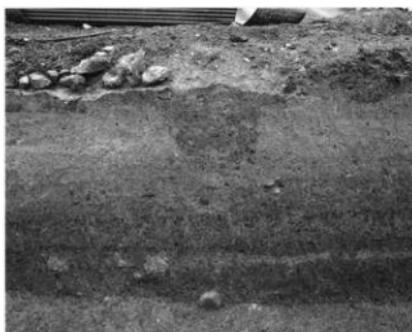
1. 3区西半全景(東から)



2. 3区東半全景(南東から)



3. 3区 SK04(西から)



4. 3区 基本土層



5. 1区全景(北から)



6. 1区近景(東から)



1. 2区全景(西から)



2. 2区南半近景(東から)



3. 2区北半近景(北から)



1. 4区全景(東から)



2. 4区近景(東から)



3. 4区 Pit10~13近景(東から)



5区全景(北西から)



1. 5区全景(東から)



2. 5区全景(北東から)



1. SB01(南東から)



2. SB01 : SP105(東から)



3. SB02(南から)



4. SB02 : SP204(東から)



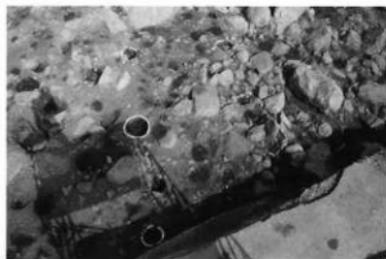
6. SB03 : SP303(西から)



5. SB03(東から)



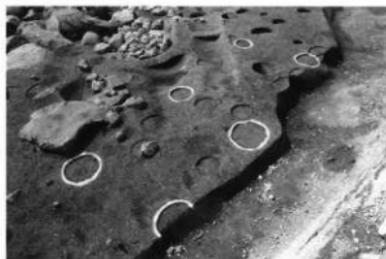
7. SB03 : SP306(東から)



1. SB04(南から)



2. SB04 : SP405(南から)



3. SB05(北東から)



4. SB05 : SP506(南東から)



5. SB06(南から)



6. SB06 : SP604(南東から)



7. SA01 : Pit15(南から)



8. SD01(南から)

1. SK07(北東から)



2. SK07土層断面(北東から)



3. SK09(南東から)

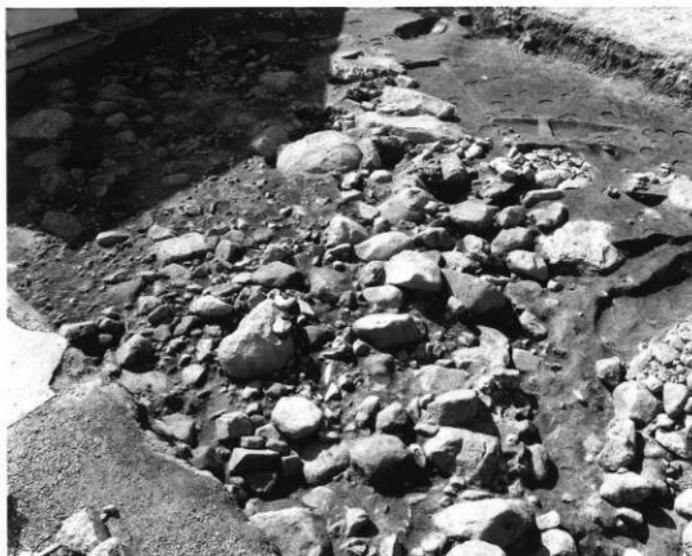




1. 5区垂直写真(遠景)



2. 5区垂直写真



1. SX01 (南東から)



2. SX01検出状況 (第6次調査)



3. SX01遺物出土状況 1



4. SX01遺物出土状況 2



5. SX01遺物出土状況 3



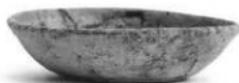
1



18



2



19



20



12



16



22



17

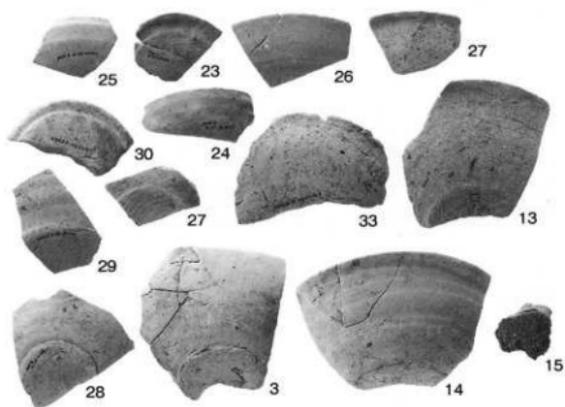


31



32

ビット・土坑・溝出土の遺物



SX01出土の遺物(1)須恵器・土師器



SX01出土の遺物(2)土師器



60



62



63



64



69



70



71



74



72



71



74



70



73



69

SX01出土の遺物(3)土師器・黒色土器



80



81



82



76



83



77



84



78



85



79



86



88



91



96



97



98



102



104



105



106



107



114



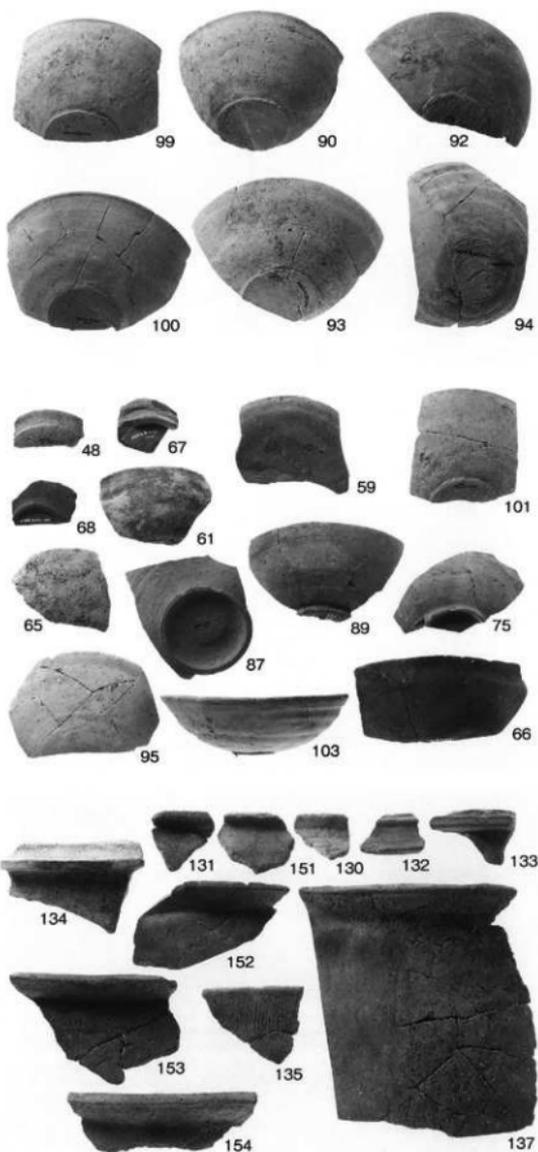
121



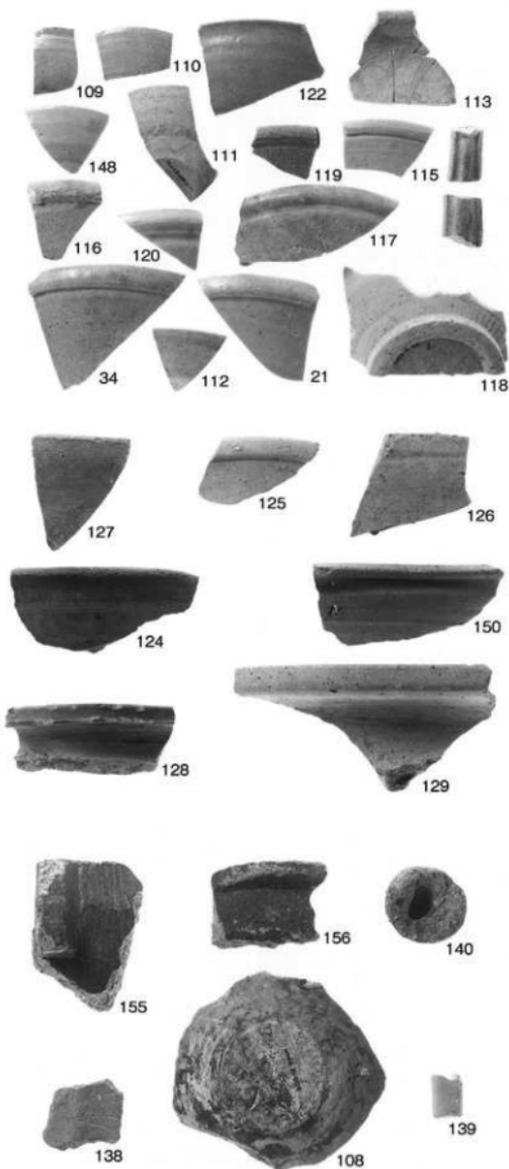
123



136



SX01出土の遺物(7)須恵器・土師器・瓦器



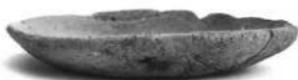
SX01出土の遺物(8)白磁・須恵器・土製品及び遺構に伴わない遺物(石鏡)



141



142



143



149



144



155



156



145



157



158



146



155



156



147



157



158

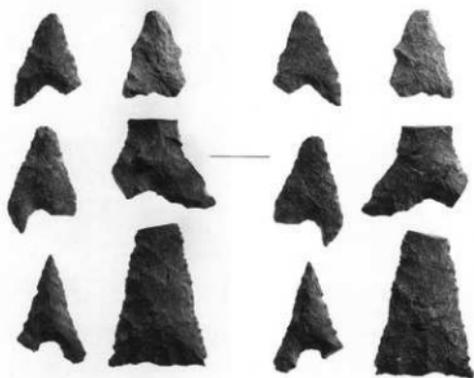
遺構に伴わない遺物



1. 炉壁 (SX01出土ササ混じり土塊)



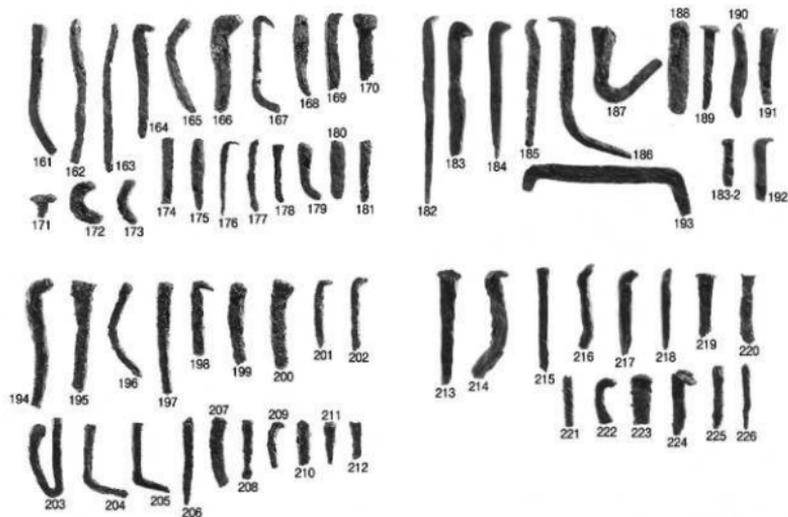
2. サヌカイト片 (SX01他出土)



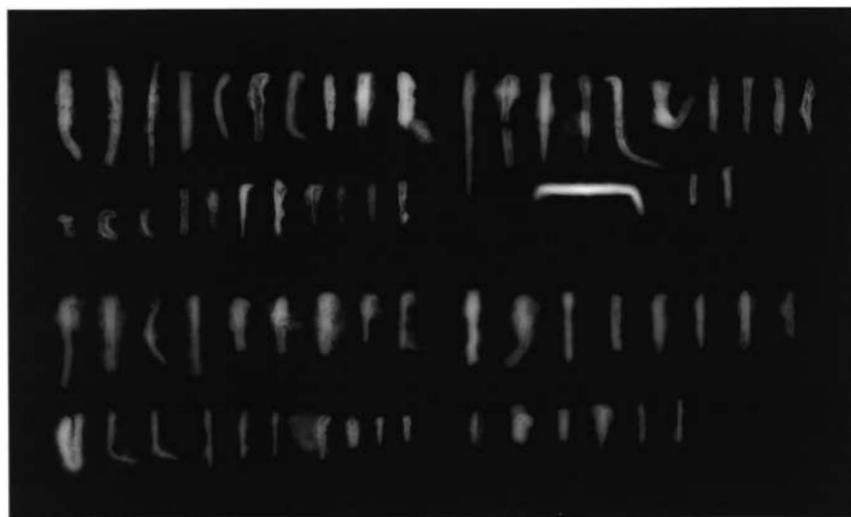
3. 石鏃 (SX01他出土)



4. 石製品 (SX01他出土)



1. SX01及びその他出土の鉄釘



2. 同X線透過像



1. SX01及びその他出土の釘以外の金属製品

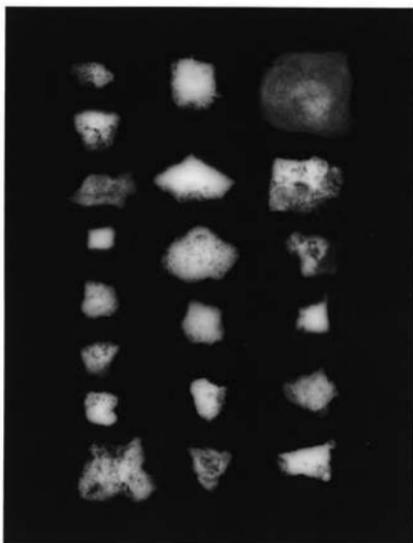


2. 同X線透過像



3. SX01出土土壌

(左から1列目:259,2列目:260~266,3列目:267~272,4列目:273~278)



4. 同X線透過像

(左から1列目:260~266,最下段259,2列目:267~272,3列目:273~278)

報告書抄録

ふりがな	にしおかもといせき だい4・5・6じ はつかつちょうさほうこくしょ							
書名	西岡本遺跡 第4・5・6次 発掘調査報告書							
副書名	本山浄水場内大容量送水管及び脱ろ過処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	藤井太郎(編)・中村大介							
編集機関	神戸市教育委員会・助神戸市体育協会							
発行機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号							
発行年月日	西暦2009年1月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしおかもといせき 西岡本遺跡	ひょうねつこうべし 兵庫県神戸市 ひがしなだなくにしおかもと 東灘区西岡本 6丁目	28101	1-43	34° 43' 48"	135° 15' 41"	20010723 ～20011022	第4次調査 216㎡	本山浄水場内 上水道施設 (大容量送水管)
						20020701 ～20020725	第5次調査 80㎡	
						20080122 ～20080328	第6次調査 356㎡	上水道施設 (脱ろ過処理施設)
							延べ652㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
西岡本遺跡	集落址	平安時代中期～後期 鎌倉時代 江戸時代		掘立柱建物・柱穴 土坑・溝 落ち込み(谷状地形) 採石土坑		須恵器・土師器・ 黒色土器・白磁・ 青磁・灰釉陶器・ 陶磁器・サヌカイト・ 石鏃・鉄製品・銅 製品・石製品・藍澤・ スサ入り土塊		石工関係
要約	標高約80mの扇状地扇頂付近において、平安時代中期～中世初頭の掘立柱建物や土坑など集落を構成する遺構を検出した。建物に近接する谷状地形からは多量の遺物が出土し、周辺における古代～中世の集落形成、土地開発の状況を知る上で貴重な資料を得られた。また遺構面に露頭する上石流に伴う転石には、石を割る、割るなどの行為が見られ、石を加えて遺構を構築する状況や技術を考える際のデータとして興味深い。谷状地形の中から出土した石には矢穴があるものがあり、付近で中世初頭までに採石が行われていたことを示す。							

本山浄水場内大容量送水管及び脱ろ過処理施設建設に伴う
西岡本遺跡 第4・5・6次 発掘調査報告書

2009.1.31

発行 神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000